

# ペドロ・ゴメズの『講義要綱』の和譯 (1595年)と日本の宗教

ジラール・フレデリック

本稿は、2010年度早稲田大學東洋哲學會大會の講演のための原稿である。この機会をあたえてくださった岩田孝會長および東洋哲學専攻の諸先生に心から感謝する。

## I 要約

西洋の宇宙論、哲學——とりわけアリストテレスの『靈魂論』——、神學の概要を宣教の目的で紹介した『講義要綱』の和譯の原稿が、つい十五年前に発見された。これは、重要な意味を持つ資料を學會に提供するものであったと言える。ただ、その文獻は公になっていながら、まだ十分に研究されているとは言えない。イエズス會の宣教師が目指したのは、日本の宗教、考え方、習慣に沿いながら、キリスト教の教える宗教的な要點——靈魂不滅論、後世の善惡の報い、自然界に於ける人間存在の位置と意味等——を唱道することであった。資料を見ると、キリスト教の基礎概念を説明する際に、日本の宗教、特に佛教用語の使用を忌避することがありながらも、結局は紛れもない佛教用語、或は現地宗教の考え方を使用せざるを得ない場合がかなり多かったことに気がつく。そのような状況に着目しつつ、『講義要綱』をとりあげ、この資料と日本の宗教とのかかわり合いがどうであったのかについて、述べようと思う。

## II 本論

1/日本の宗教を把握するのは非常に重要な課題であるとともに、非常に困難な課題であることは認めざるを得ない。日本の宗教については、いろいろな宗派を並列させることで終わるものと、日本の宗教の本質はこれ以外は無いと斷定するものとの二つの極端な態度が目立つ。眞實はその極端な態度の間にある

と考えられるが、それを掴むのも非常に難しい。純粹な日本的宗教を理想とした本居宣長のような見方と、神道、道教、儒教、佛教とが差異を持ちつつ並存したり對立したりしている狀況全般をフラットに描く近代の日本宗教觀とを兩極とすれば、その間にあつて、本當に信じられ、生きている日本の宗教は何であるかを把握することは極めて重要であると思われる。

そのような點からしても、十六世紀の半ばに來日して土着信仰と交つた切支丹という宗教そのものと、切支丹がどのように取り入れられ、吸収され、また日本の他宗教からはどのように利用され、反應を受けて、批判されたかという事を研究するのは、極めて重要な課題と言えるであらう。

そういう點では、來日したてで知識も乏しいイエズス會の宣教師達が、その書簡、特に毎年三月十五日に一年間の日本に關する情報を纏めた年報の中で行った日本の宗教の描寫は、たいへん貴重である。それをみると少なくとも初期の段階では、日本の宗教というのは、佛教の宗派の範圍に收まってしまう、儒教や神道が獨立して出てくることはない。その佛教については、三つの宗派が目立つ。まず法華宗、即ち、日蓮宗と、場合によっては天台宗、次に淨土教、即ち、法然が開いた淨土宗と親鸞が開いたという一向宗、淨土眞宗、そして禪宗、ニヒリスト的、享樂主義的に描寫されている曹洞宗、臨濟宗である。それぞれの宗派の描寫の中には、かなり間違つた、誤解されている内容も多いが、事實を語っている部分もかなり含まれているので、重視すべき資料だと思われる。

三つの宗派以外に、山伏が、僧兵と修驗道を混同し、子供等の生贄を行なう殘酷な山岳信仰として述べられ、山伏と眞言宗を同一視して弘法大師をその野蠻な宗教の創始者としている。佛教以外の主なものでは、神祇として、儒教の忠義や孝行、動物と人間の怨靈の祟りと鎮魂、鬼神の崇拜、陰陽道の占い等（つまりそれは儒教と神道或は土着信仰を一セットにした民間や貴族の信仰）であるが、實際にはそのようなものを日本人は崇拜し畏怖し信仰していると述べている。

今、述べた日本宗教の描寫はイエズス會による描寫であるが、それらは雪窗宗崔の『對治邪執論』（1648年）とも共通する。この書と、同じ時期にヨーロッパ

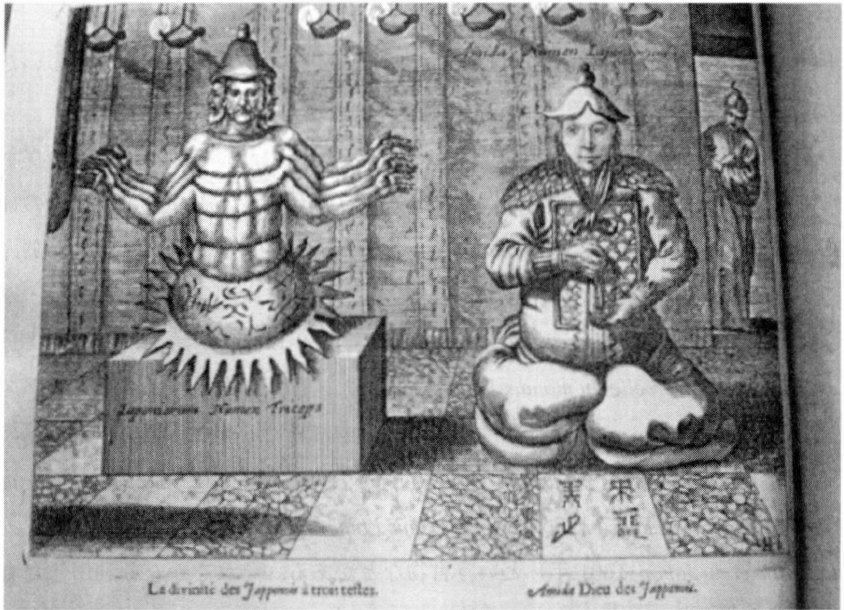
ペドロ・ゴメズの『講義要綱』の和譯（1595年）と日本の宗教（ジラルル）

パで日本宗教のことを述べた書物は、ほぼ同じことをいっているのであって、日本側もヨーロッパ側も大體同じ資料に基づいて日本の宗教信仰を語っていたといえるであろう。

ヨーロッパではルイス・フロイス Luis Frois（1583-1597）の『日本史』、ヴァリニアノの『日本のことの要綱』 *Sumario de las cosas de Japon*（1583）とその補遺 *Additiones*（1592）、又はマカオやマニラからヨーロッパへ送られ、また翻譯されたイエズス會の數多い年報等に基づいてフランス人のフランキスクス・ベレフォレスツス G. Franciscus Belleforestus（1530-1583）が著した『世界史』（*L'Histoire Universelle du monde*, Paris, 1570）やスペイン人のルイス・ド・グスマヌス Luis de Gusman の『東印度、中國、日本に於ける聖なる福音を説く爲のイエズス會會員の宣教』（*Des Missions que les religieux de la Compagnie de Jésus ont faites, pour prêcher le Saint Evangile dans l'Inde orientale et dans les royaumes de la Chine et du Japon*, 1601年）という書物などがある。それをかなり利用した有名なアタナシウス・キルヒャー Athanasius Kircher（1601-1680）は、『エジプトのエディプス』 *Oedypus Aegyptiacus*（1652-1655）の中で日本の宗教、特に佛教について言及し、ギリシャ、ローマの神々と東洋即ちヘブライ、シリヤ、カルデア、ペルシャ、サマリタン、さらに遠くの印度、中國、日本、タートル、モンゴルの神々は皆エジプトを源流としていると言う。

そうであれば、日本の神々はエジプトの神々を源にして印度と中國を通して日本に到っていることになり、事實その形跡を残していると言う。

彼によれば日本人の崇拜の對象、即ち神々の宗教組織は、エジプトを出発点にして印度、中國の宗派を通ってきたのであって、その結果、主に二つの宗派からなっている。靈魂不滅を認めていない宗派即ち禪宗と、それを認めている宗派即ち阿彌陀信仰である。禪宗とはあの世と善惡の報いを否定し、ギリシャのエピクロス派にあたり、また神の偶像を崇拜している。立派な寺院の中では、日本の王者を尊び加護する誓願を行っている。それは、この世で起こる災難、怨靈が現れる原因となる夭死を豫防するための祈禱を行ない、敵に對する勝利を祈り、現世利益ばかりを願う宗派であると言う。それに對して靈魂不滅を唱



キルヒャーの「繪圖の中國」(1665)の中に見る阿彌陀像

えるのは、阿彌陀という偶像を崇拜し、ヨーロッパ人の習慣とは通じあわない色々な作り話を語っている宗派であり、救われる爲にただ「南無阿彌陀佛」と數珠を使ってとなえればよいというばかばかしいものであると述べている。本尊の阿彌陀はエジプトのホラス神に当たり、蓮の上に坐っているグノシスのハルポクラトス即ち沈黙のホラス神に当たると言う。また法華宗について、釋迦を崇拜して南無妙法蓮華經を唱えれば救われるという宗派だと述べている。釋迦の門徒の中でそのような言靈のエネルギーを使い靈性を崇拜し即身成佛となえる人物として Cambadagi (弘法大師か) や Cacubao (覺鑊か) がいるという。その宗派は悪魔と約束を交わした山伏即ち僧兵という宗派と繋がっており、エジプトの神々の靈魂の崇拜や現代の嘘つきのジブシーの占い人と同じであるという。

キルヒャーのエジプトを源流と見る世界宗教の見方は、その新プラトン派的な解釋も相俟って、相當ヨーロッパの知識人の間で影響力を持ち、近代の宗教學をも含めて現代人の東洋の宗教の見方を形成した。今でもキルヒャーの見方

から完全には自由になっていないとすら言い得る。

特筆すべきことは、日本に到着したイエズス會の宣教師達は殆ど南日本しか體驗していないことである。南日本の社會は、主として母系社會であって、信仰の上では色々な形、姿での觀音に觸れていることになるから、女神の信仰對象を意識するようになった。そういうことを知っていたので、恐らくわざと、土着信仰の觀音と外來信仰のキリスト教の聖女マリアを同視させようとしたと思われる。かくてマリア觀音の崇拜は隠れ切支丹時代以前からの現象であったことが明らかになる。もう一つは、南日本には壓倒的に淨土教、とりわけ禪宗が多かったので、イエズス會の神父達の日本宗教の見方には、眼の前に見えた僧侶團體の影響が強かったと言える。

そういうことは、例えば書簡や年報の中で、日本佛教の阿彌陀佛と觀音菩薩とが、思想的にも圖像的にも混同され同一視されていることからわかる。それにほとんどの年報では兩方とも女神とされているが、知識不足のせいだけではなくて、宣教師達の日本宗教の感覺では、佛・菩薩には女性的な性格のイメージが、社會的にも信仰的にも直ぐに浮かんできたことを反映していると言える。そのことは、當時の近世ヨーロッパの出版物の、特に圖像が挿入された東洋の歴史・東洋の地理・東洋の宗教のところに、女性的な阿彌陀佛、女性的な觀音菩薩がよく混同されて描かれていることから知られる。

イエズス會の年報や書簡に基づいて、ヨーロッパで十七世紀・十八世紀に東洋の歴史・地理・宗教に関する書物がかなり出版され、東洋の宗教に関する知識が流布し傳達されるようになったが、當然ながらその知識の中には正しいこともあれば間違ったことも多い。その上、ヨーロッパの偉大な學者、哲學者も獨占到東洋の宗教を論じたので、かくて二重に曲解された知識が傳播されることにもなった。今でも、専門の東洋學者を除いた一般知識人や一般庶民の間で、そういった曲解された知識が、その名残りとして流布しているのが目立つ。一例として、ヨーロッパに於ける宗教學の創始者の一人であり、有名なギメ國立東洋博物館を開いたエミール・ギメ Émile Guimet (1836-1918) の宗教觀、日本の宗教觀は、我々現代人の東洋・日本の宗教の見方のもとを築いているとも言えるのであるが、彼すらもそのような見方からは未だ完全に自由になってはい



「エジプトのエディプス」(1652-1655)

「繪圖の中國」(1677、アムステルダム)の中にもみる阿彌陀像

なかった。そのことは詳細に研究する価値があると思われる。

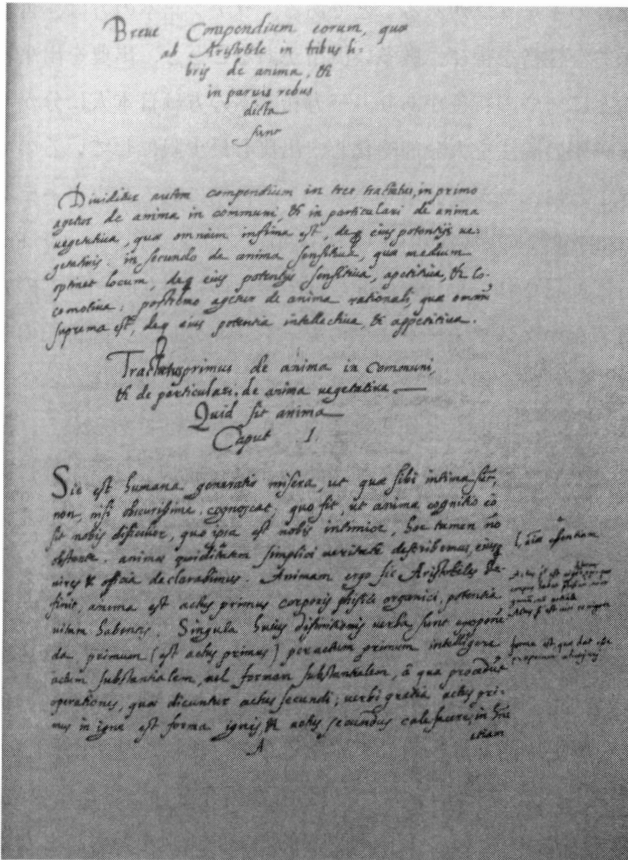
2/さて、言語的、文化的文脈の中で特別な位置を占めているのが、今回取り上げる『講義要綱』という文献である。この『講義要綱』は十六世紀のイエズス會における、トップレベルの何十年もの教育政策の成果であり、しかもラテン語と日本語の両ヴァージョンがある。つまり本書によって當時のヨーロッパの最高レベルの科學、哲學、神學の知識が日本に導入されたことになり、その日本受容に當たって日本への適應も考慮しているため、本書は日本に於ける西洋の知識の輸入の歴史と、日本の宗教への適應の様相の研究に非常に役立つ貴重な資料なのである。この文献のさらに貴重な點は、ラテン語本と和譯本との

ペドロ・ゴメズの『講義要綱』の和譯（1595年）と日本の宗教（ジラル）

間に、かなりのギャップがあることである。ラテン語本の方は、哲學神學上後期スコラ派的な性格を帯び、数多い引用があることと、出典を出来るだけ明記していることに一つの特徴があり、一方和譯本の方は日本人に分かりづらいスコラ派哲學神學の論法を大分簡略化し、出典も最少限にしているのである。また驚くべきことに、ラテン語本がバチカン圖書館にあるスウェーデン女王クリスチナ（1626-1689）の蔵書の中から1937年にフランツ・シュッテ Franz Schütte 神父によって発見されて以来、研究されてきたのに対し、和譯本の方は、十五年前に、有名なオクスフォード大學のモードリンカレッジ圖書館の中に中國書物と混ざっていたのを偶々見つけられたことで初めて世に出た。つまり発見後活字にはなったが、もともと知られていなかった文献であるから、研究もまだ十分とは言い難い。であるから、私がこの文献を通じて日本宗教に關して氣づいたことの一部を今回述べるのも、相應の意味があると思っている。

ただ本論に入る前に、『講義要綱』を對象に研究した何人かの研究者の名前を擧げておかなければならない。先ず、オクスフォード大學で『講義要綱』の和譯を発見したアントニ・ウセルレル氏（Antoni Uçerler）である。彼はこの文献について、歴史學的文献學的に丁寧な紹介を行なった。次に、『講義要綱』の和譯を活字にし、有益な注をつけて思想的な紹介を行なった尾原悟氏がいる。尾原氏はアーノルド・トインビーの思想的歴史的假説を參考にしながら、特に江戸時代においては、西洋の科學知識・宇宙論の輸入が容易であったのに対して、西洋の哲學的神學的な知識の消化・受容は困難であったことを強調している。

また、『講義要綱』に直接觸れているものではないが、一般的な紹介と問題提起としていまだ價値を失わない研究として、海老澤有道の『南蠻學統の研究』という有名な書物がある。その中には、イエズス會の教育制度、教育規則、學術、學問制度に關する記述があり、『講義要綱』の天球論を通じてアリストテレスの哲學思想はどういうふうによりに於いて受け入れられたかを明らかにしており、『講義要綱』の學術的方面的の諸問題を理解する爲に役に立つ。



『講義要綱』の「靈魂論」のラテン語版

別の方面では、西洋人の研究者 Jose Miguel Pinto dos Santos に、和譯の「神學綱要」の中に描寫されている宇宙論に注目している研究がある。また和譯本ではなくラテン語本を用いた研究ではあるものの、神學者のロペーズ・ゲー (Lopez Gay) 氏の研究は勝れたものである。というのは、彼はゴメズの『講義要綱』の中で、特にゴメズが意圖した神學的、慣習的、信仰的、儀禮的な適應に留意している。中でも、神や超自然世界への媒介者としてキリスト以外に、普通はキリスト以下に置かれているマリアを、神學の上ではキリストのレベルに置くゴメズのことを、ヨーロッパでは先驅的、革命的な立場に立っていると注目して



ペドロ・ゴメズの『講義要綱』の和譯（1595年）と日本の宗教（ジラル）

いる。いい換えれば、ゴメズは二十年近く日本に滞在した経験を基に、観音や阿彌陀といった日本人の信仰に適應する神學を單獨で考えて成立させようとしたということになる。

比較的最近に出た日本人の研究の中では、平岡隆二氏は特に『講義要綱』の天球論に目を向け、神崎繁氏はアリストテレスの『靈魂論』の中國と日本、即ちリッチとゴメズによる受容の概観的な研究をしている。さらに専門的個別的な研究として、井手勝美氏が、『講義要綱』の第三部たる「神學綱要」第一部第六十八章に見える強制改宗の「權論」、つまり一方的に權力や權威を使って上からなされる布教方法に關する批判的な態度について論じている。要するに、政治と宗教とは1620年までローマ法皇から獨立することが認められなかったのであるが、そのような時代でも、日本管區長のヴァリニアーノ、日本准管區長のゴメズ等の宣教師達の態度は、『講義要綱』の和譯を見ても家臣の信仰の自由を唱えた點で先驅的であったことを明らかにしている。

また、淺見雅一氏は別な視點で『講義要綱』の第三部である「神學綱要」の偶像崇拜の箇所を考察し、未信仰者・世俗者・在家・非信仰者・異端者とは何かを問う際、無駄な殉教をしなくてもよいという相對的な信仰告白の慎重な態度を示していることに着目している。その際、迫害者からの避難に關して、ラテン語本では一般信徒にのみ容認し、聖職者は殉教すべき事とされているのに對し、和譯本は聖職者にも容認していることを指摘している。また、キリスト教國とその敵國が信仰と關係ない理由で争っている時に、敵國の人からキリスト教徒か否かを問われるような場合は、國籍を問われるのと同義で信仰とは關係ないから、迫害を避けるためにキリスト者であることを隠すのは大罪ではない、としている點にも言及している。なお、その國籍を問うという例として、ラテン語本ではルジタニア人・イタリア人を擧げているのを、和譯本では高麗人・中國人としている。これは淺見氏の言うように單なる言い換えにも見えるが、ただ、ルジタニア（ポルトガル）もイタリアもキリスト教國であり、ルジタニア人・イタリア人だとわかれば當然キリスト教徒だとわかるのである。それをキリスト教と無關係の國に置き換えることで、かかる場合の信仰告白の重

みが和譯本ではさらに軽くなっているとも言い得る。

ところで、淺見氏が取り上げた問題點については、いささか異なる見方も出来るのではないかと思われる。『講義要綱』の中では、異端者の定義には非常に繊細で細かい分析が行なわれている。それは、宣教師にとっては日本人は、一方では佛教を信仰する異端者として、もう一方では、かつてのローマ人と同様にキリスト教を知らなかったのであるから異端者ではなく未信心者としか言えないのではないかという意識があつて、殉教についても、キリスト教に關して無知な迫害者をどこまで責めるべきか、ということの問題にしているとも考えられるのである。

さて、ここで問題にするのは、別のレベルであつて、それは日本人の思想に對してどういう態度を取るべきかということと關わる。例えば、『講義要綱』は一つの問題を論じている時に、啓示 (*revelatio*) と自然の理性 (*ratio naturalis*) といった両面の論法を進めている場合が多い。つまり、神の存在について論證する際には、まず啓示にあることを挙げ、それからプラトン・アリストテレス・ストア派の哲學者達も認めていることを挙げ、兩者を論據に眞實と結論づけるのである。ただ、啓示としては舊約新約聖書や十六世紀までの神學者を擧げるのに對し、自然理性の哲學者として擧げるのはギリシャ・ローマの哲學者であり、せいぜいキケロまでで終わりである。それはキケロより後の哲學者はキリスト教を知っている以上、異端者の罪に陥る可能性があるからである。この點では、日本人は古代ギリシャ・ローマ人と同様に扱つてもよいと宣教師達が思つていたのであつて、日本人の言っていることは、自然の理性で自分で發明したということになる。そうすれば日本人の考へて言っていることで切支丹の主張と一致することがあれば、古代ギリシャ、ローマの哲學者が言っていることとカトリックの主張とが合致するということと類似したものとする事ができる。その意味で、宣教師達は、特に對立する佛教者の主張に關心を持ったのである。

ペドロ・ゴメズの『講義要綱』の和譯（1595年）と日本の宗教（ジラール）

このように見ていくと、日本に於けるペドロ・ゴメズの役割は中國に於けるマテオ・リッチ（1552-1610）の役割と類似していることになる。それは両方ともヴァリニアノの教育・宣教の政策のもとで活躍したためでもあるが、リッチは寧ろ天才的で、想像力の溢れたやり方で、カメレオンの宣教をしたのに対して、ゴメズはおよそ二十年の教育経験に基づく宣教を行ったため、悲劇的なことに、場合に依っては眞面目過ぎるやり方であった感がする。この点では両者は對照的であるが、對應や適應 (*aggiornamento*) という点においては、非常に近接していたと言える。要するに、ゴメズはマテオ・リッチの日本版と言える程の重要な人物である。ただ、兩者の置かれた社會的、思想的狀況の差異には注意すべきである。中國にあっては、話し合う相手は主として儒者であり、キリスト教と中國人と對話やキリスト教に對する反應を反映している書物や文獻も數多く残っている。日本では話し合う相手は主として佛教徒（特に禪宗や淨土教の信徒）であって、残っている文獻も非常に少ない。四十年間の教育、思想、學術制度と政策を総合的に纏めた膨大な『講義要綱』は、日本に於いての文獻の乏しさを考えれば、なおさら貴重なものとなろう。

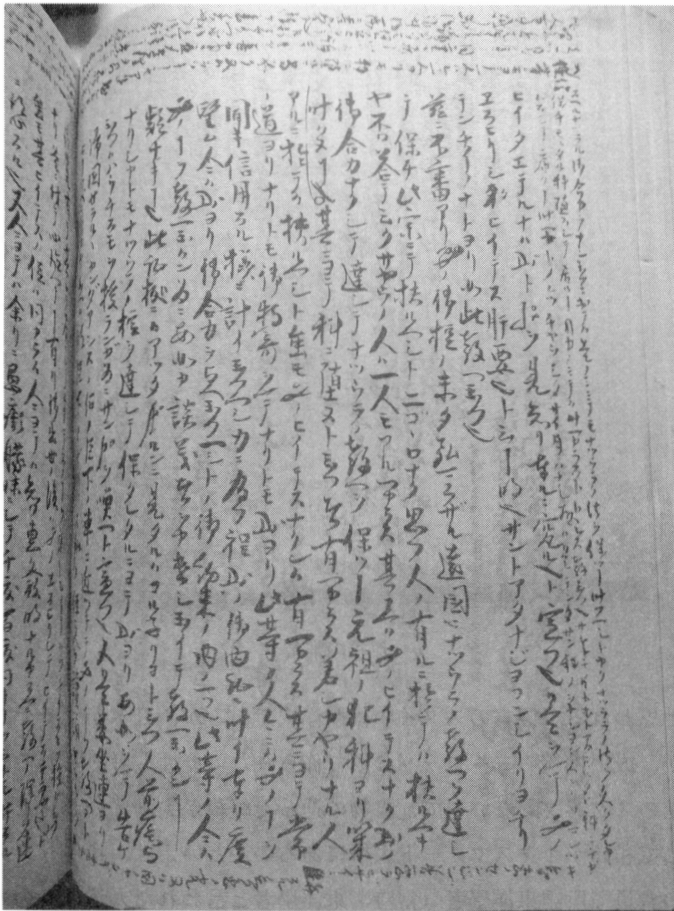
3/ そもそも『講義要綱』は、ラテン語のテキストの題『日本國の准管區長ペドロ・ゴメズ Pedro Gómez 神父によって作られたイエズス會の日本人イルマンと在家または初心者である堂宿に向けたカトリックの教義』(*Compendium Catholicae Veritatis, in gratiam Iapponicorum fratrum Societatis Iesu, confectum per Rdm. Patrem Petrum Gómezium Vice-Provincialem Societatis Iesu in provincia Iapponica*) が示すように、日本人の聖職者の爲の教理教科書である。著者は日本人とヨーロッパ人を平等に見て扱おうとしたヴァリニアノの長年の政策を實現していき、それに基づいて日本人の説法者・聖職者を教育するための教科書を作ったのであって、彼が二十年間の教育経験を生かして日本に適應した天文学 (*artes liberales* 自由學藝の一部)・哲學・神學の教科書 (カテキズム) をつくったことがわかる。アリストテレスの本體論をカトリックの神學と同じように扱ったヨーロッパの後期スコラ派の知識<sup>(1)</sup>と、プロテスタントと戦ったトレント會議 (1545-1563) のカテキズムと、ザヴィエル・ヴァリニアノの適應主義

の知識體系を上手に纏めており、勝れた教義書といえる。十七世紀の始めまでは、ヴァリニアノの『佛法の略次第』（残念ながら現存せず）と共に教育の基礎になっていたことが分かる。<sup>(2)</sup> ゴメズ自身が、ポルトガルのコイムブラ Coimbra 大學で有名なアリストテレス哲學者・神學者のペドロ・ド・フォンセカ Pedro de Fontaseca (1528-1599) と、シブリアノ・スアレズ Cipriano Suárez (1524-1593) と『辯舌規程』 *Institutionum dialecticarum, Libri octo* を 1564 年に出しているという経験を持つ教育者であった。ゴメズが 1583-1585 年から府内コレジオで哲學と神學の講義を開き、天草の河内浦のコレジオで講義を行なうようになった時に、日本語の上手なペドロ・ラモン Pedro Ramon (1549-1611) が 1593-1595 年の間に『講義要綱』の和譯を企てていることが分かる。彼は翻譯が終わってすぐにマカオに移っているので、日本にはコピーのみを残して、自分が手を入れたテキストは持って行ったと考えるのが自然であろう。1594-1595 年に天草でペドロ・モレホン Pedro Morejón (1562-1639) によって和譯が讀まれたことが分かる。『講義要綱』の和譯は、日本では 1618-1620 年まで、Fukan Fabian Ungyō 不干ハビアン雲居 (1565?-1621) の『破提字須』を論破する爲の資料として使われた記録があり、マカオでは 1616 年まで讀まれていた記録があるが、その後の消息は分からない。『講義要綱』が、ラテン語本であれ和譯本であれ、天草もしくはマカオで活字になったかどうか、残念ながら證據がない。

しかし、ラテン語本はスウェーデンのクリスチナ女王 (1626-1689) のバチカン藏書にあったのであるから、ラテン語本と共に和譯本も恐らくマカオからヨーロッパに渡り、彼女の手に入った可能性はあるかもしれない。というのは、広い意味で『講義要綱』の重要な主張の中に「意志の自由」ということがある。クリスチナは、初期印刷本インクナブラの涉獵者として知られており、また、戀愛物語に溢れる生活を送っていた彼女が退位してバチカンに退いた理由として、フランス人哲學者のルネ・デカルト René Descartes (1596-1650) の自由意志の説に惹かれてプロテスタントからカトリックに回心したということがあるからである。勿論、彼女が『講義要綱』を枕頭の書物にしたというのではないが、自由意志とマリア處女救済を主張している書物であるだけに、彼女の關心範囲に入っているとはいえるし、彼女の周りに東洋學者とされるイエズス會の神父

の名前が何人が挙げられることもあり、和譯を入手していたとしても、少なくとも不自然とは言えない。

4/『講義要綱』は、形の上では上下の空白部や行間への書き込みがかなりあるため、未完成の原稿のように見える。後に取り扱う翻譯の問題から見ても、その印象は更に強くなる。製本をするために、その上と下の行が途中で切られているので、もう讀まれなくなった時期に、日本語を知らない人によって製本



『講義要綱』の「靈魂論」和譯の原稿の加筆



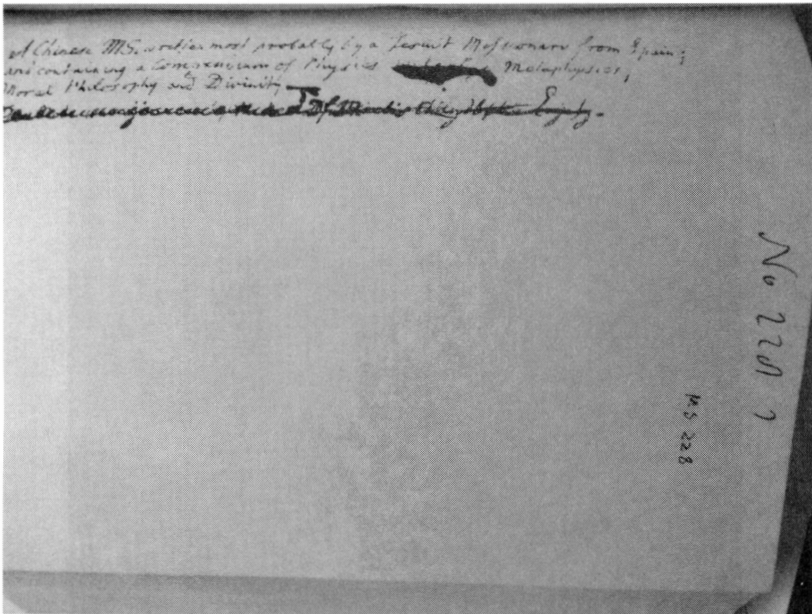
原稿の推敲

されたと思われる。製本のスタイルは西洋式であるが、日本かマカオか、パタゴニアか、或いは寧ろヨーロッパの國で作られた可能性も考えられるが、何處の圖書館のスタンプもないので、書物の辿った経緯が完全に分からない。

どうして和譯がオクスフォード大學にあるのかといえ、イギリス人のイエズス會の會員で所謂東洋學者（當時、東洋學者と言われた人達はせいぜいヘブライ語や中近東の言語に多少の造詣のある學者である。例えば、キルヒヤーは

ペドロ・ゴメズの『講義要綱』の和譯（1595年）と日本の宗教（ジラルド）

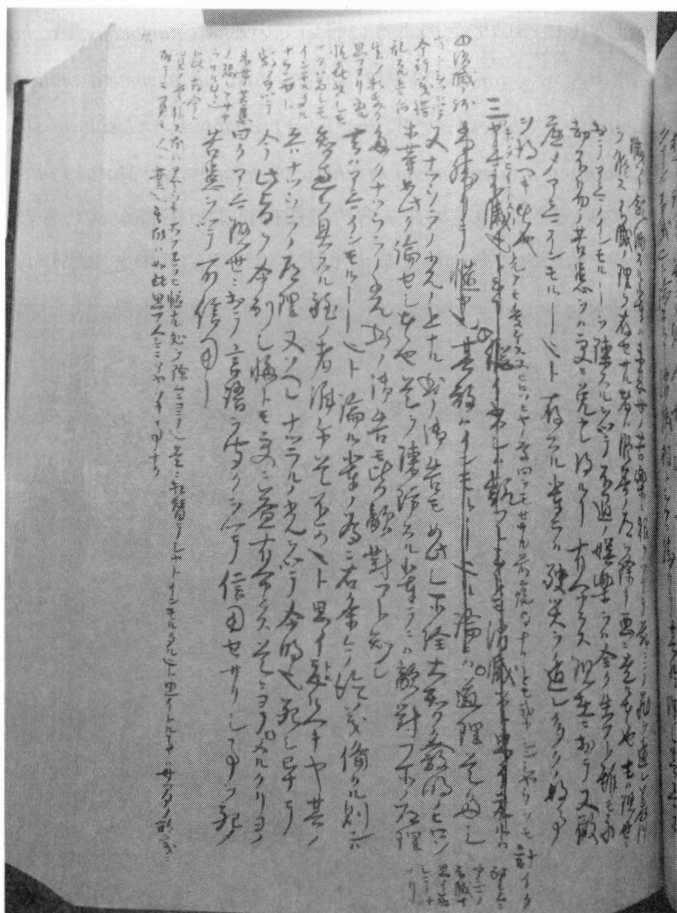
ヘブライ語やエジプトのヒエログリフを解讀出来たと自慢していたので、東洋學者ともされている）のトマス・フェルファクス Thomas Fairfax やベケット Beckett (1656-1716) が一年間だけ（1667-1668年）オクスフォード大學のモードリンカレッジで、例外的にカトリックとしてアングリカンの國の大學で教えることが許されたが、間もなく學生や人民に石を投げられて慌てて町から逃げたので、手元にあった『講義要綱』の和譯をそのまま大學に置いてきてしまったためと考えることもできる。そうだとすれば、『講義要綱』は三世紀以上中國の書物と一緒に本棚の上で眠っていたことになる。十八世紀の圖書館長のアンリ・コクスは本書について次のように書いている « *Chartaceus, ex charta laevigata in 4°, ff. 365; sec. forsan XVII. Liber sinensis, cui praemisit manus recentior titulum sequentem, 'A Chinese ms. Written most probably by a Jesuit missionary from Spain and containing a compendium of Physics, Metaphysics, Moral Philosophy and Divinity'.* » 「スペイン人のイエズス會の宣教師によって書かれたものと思われる中國文書。その内容は物理學と形而上學と倫理學的哲學と神學からなってい



『講義要綱』の「靈魂論」和譯の英文紹介（18Cごろ）

る。」ここにスペイン人の宣教師のことが書かれており、しかも『講義要綱』の製作事情に詳しい図書館長であるから、本書の存在が記憶されていたのであろう。

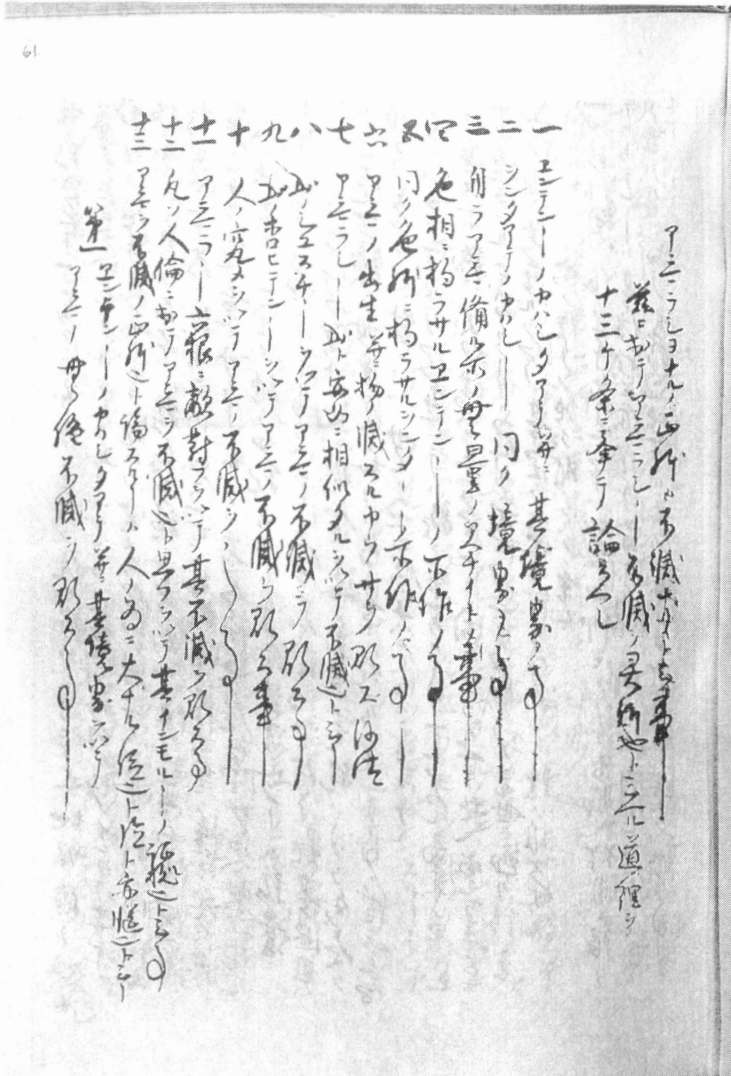
『講義要綱』は三部からなっている。第一部は天球論、即ち自然物理學要綱 (*De Sphaera, Compendium physicae naturalis*) といつてアリストテレスとプロレメ系統ヨアニス・ド・サクロボスコ Joannis de Sacro Bosco (12世紀末-1244 (1256)) (*Tractatus de Sphaera Mundi*) の宇宙論、天文學、物理學、天候學、グレ



製本時に部分的に裁斷された例



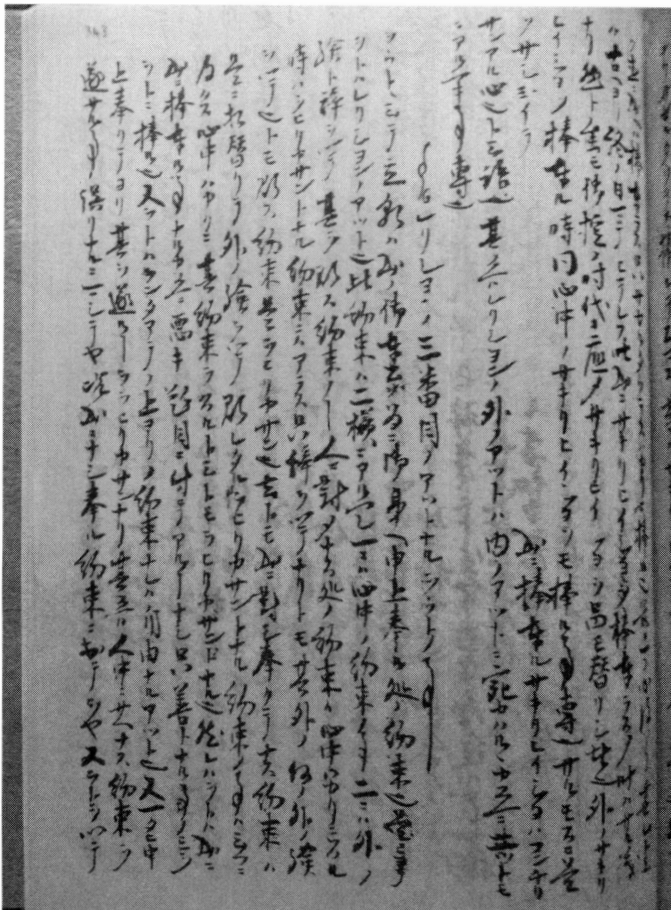
ゴリアン曆學を扱っている。自然世界の法則を明らかにした上で、不可思議で奇跡のように見える説明のつかない現象を、その法則によって合理的に説明する方針の書物である。實はこの部分は和譯の『講義要綱』には無い部分である



ラテン語のない部分の目録

が、儒者の小林謙貞の『二儀略説』(1682)や、儒者の向井元升(1609-1677)の参照した澤野仲菴(棄教者の Chritovão Ferreira, 1580-1650)の『天文備要』に當たることが分かっている。

第二部はアリストテレスの『靈魂論』第二節と第三節に基づいて、身體を生かす運動の原理と人間の知識の原理としての靈魂について解説しており、トマス・アクイナス(1225頃-1274)のものを主としフランシスコ・トレツース Franciscus Toletus の注釋をも利用して説明している。センテンシアの形をとっ



『講義要綱』の「神學」の和譯

ペドロ・ゴメズの『講義要綱』の和譯（1595年）と日本の宗教（ジラル）

ているので、反論や異端者の議論の部分を省いて、積極的に眞理を表している議論だけを説いている。この部分の一番重要な所は、ラテン語本にない最後の部分、即ち靈魂不滅論を詳しく総合的に論じ証明しようとしている箇所である。ラテン語本にないので、恐らく、この部分は日本人の翻譯者の手になったところが一番多く、日本の風土に適應させようとした『講義要綱』の最終目的が見取れる。

第三部はトレント會議のカテキズムとトマス・アクイナスを中心にした神學と道徳問題、教會法や現地慣習適應の問題を扱っている。ここにも日本人に無駄な疑問を起こされることを懸念し、異論・反論・異端者の説を省いて、積極的に説かれている神學の部分を書いている。第二部第三部ともに、最も重要な敵である佛教の考え方への反論・反證・反駁がないことが注目に値する。

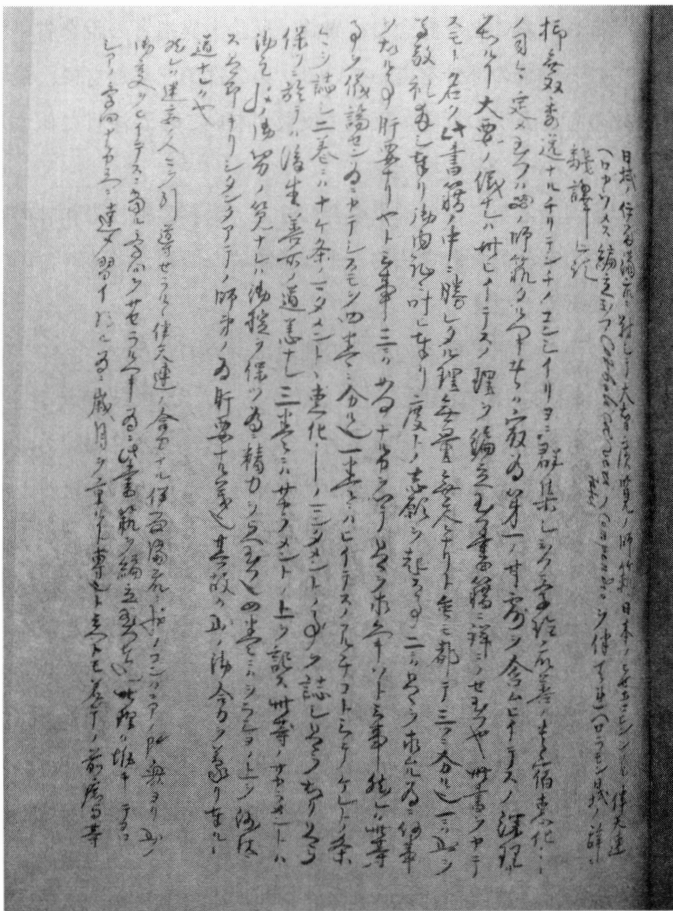
5/ 第二部の靈魂論と第三部の神學を合わせた『講義要綱』の和譯の膨大な原稿には、思想的、宗教的、教會法的、また言語的な問題が多く、この方面の研究はまだこれからだと言える。

ここでは幾つかの言語・概念の翻譯の問題に留めておきたい。

思想的・宗教的・慣習的な適應主義の政策があっただけに、ラテン語本の『講義要綱』の中にも日本宗教への配慮がある筈である。そして和譯の場合に尙更その配慮が強い筈である。當時は原則的に、ザヴィエルの時代に行なわれていた大雑把な同一化への反省から、佛教とキリスト教が混雜されないように、バルタザール・ガゴ Balthasar Gago (1520-1583) の翻譯政策により 1555年から佛教用語を使うのを禁止するようになっていた。天草版の切支丹文獻を見てもわかるように、その禁止はきちんと守られたとはいえなかったが、しかしそれでも時代が下るとともに、段々と守られるようになる。例えば 1592年第一版のドチリナ・キリシタンでは、*liberatio* は「解脱」と何回も翻譯されているのに對して、1600年第二版のドチリナ・キリシタンでは「解脱」が完全に消えて、「自由」と譯されている。<sup>(3)</sup>

もう一つの現象は、誤解され易い翻譯語を使用するよりも、ラテン語やポルトガル語やスペイン語の言葉をそのまま音寫で轉寫語として使うことである。

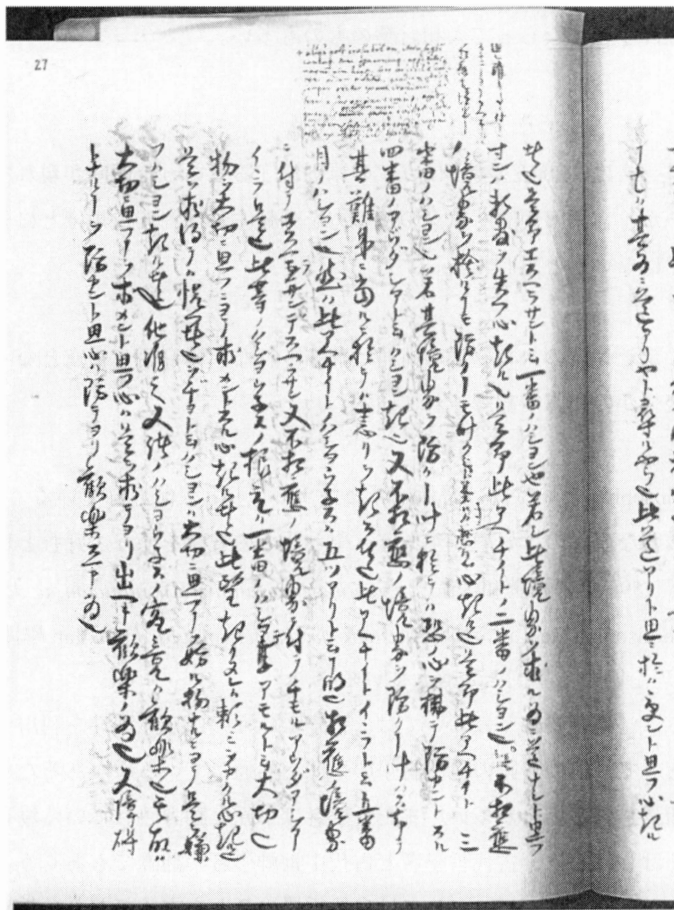
そのやり方はある意味ではサンスクリットから中國語に佛典を翻譯した時のことをも思わせる。翻譯されなかった言葉は、翻譯し難かったり、翻譯しても深く廣い意味が狭くなってしまう恐れのある佛教の基礎概念、たとえば、佛陀、菩薩、菩提、涅槃等であるが、これらを狭い意味に限定するなら覺者、大士、悟道、無爲と譯すことになる。それと同じように、キリスト教の根本概念を音寫による轉寫語のままにしたことは、佛教的なやり方がある程度まで参考にしたのではないかと思われるのである。『講義要綱』の翻譯作業に参加したと思



『講義要綱』の「靈魂論」和譯の原稿のラテン語挿入

ペドロ・ゴメズの『講義要綱』の和譯（1595年）と日本の宗教（ジラルール）

われる者は、日本に於けるキリシタン文學の父と呼ばれるパウロ豫保謙（1508?-1595）とその息子のヴィセンテ法印（1540?-1609）<sup>(4)</sup>ヨーロッパの使節に参加した伊東マンシヨ（1570-1612）、日本語の文章の巧い不干[齋]ハビアン（1565-1621）、ホアオ・山口など、殆どが佛教出身であるだけに、その可能性はありうる。このグループの翻譯者は『講義要綱』が完成された年に『羅葡和大辭典』に参加した可能性があるし、兩方のものを見ると翻譯の仕方が完全に重ならないにしても、かなり近いとはいえる。もともと『講義要綱』は、どちらかと言



原稿のラテン語の注

えば1603年出版の『日葡辭書』の翻譯の仕方に類似している印象がある。

書法の上からも『講義要綱』の原稿は數人の手からなっていると思われる。例えば、同じ日本語の言葉、読み下しの言葉が複数の轉寫語、音寫語で寫されているし、場合によってはラテン語の原文のない和文の所に通事の手になるとされる中國語の白話の言い回しがある。日本語の「ぎょうぎ」は「行儀」になったり、「形儀」になったりして、日本語の「いかなる」は古典漢文の「如何」となったり、白話の「什麼シモ」になったりする。切支丹教學の術語は、ラテン語、ポルトガル語、スペイン語、漢文の成語のままになっている以外に、通事の翻譯手帳にならって大和言葉のものも多い。

### Ⅲ

さらに言えば、『講義要綱』はガゴの原則を守るといった傾向が現れているに違いないが、言葉・用語・概念の使い方を分類すれば、五種類ほどに分類が出来るのではないと思われる。

1/同じラテン語のスコラ派の術語は翻譯されない轉寫語・音寫となっている外に、幾つかの和譯で翻譯されている。

● *Philosophia* という語は普通は「ヒロソヒア」と表記されている<sup>(5)</sup>。同じ頃には嚴密な直譯の「好學」があり、學としての智慧を慕う・好むと理解している<sup>(6)</sup>。1595年の羅葡和大辭典 *Dictionarium latinum Lusitanicum ac Japonicum* では、*Philosophia, ae. Lus. Amor, e estudo da sciencia ou philosophia. Iap.* 學問の好き、I. 萬物の理を明むる學問と定義している<sup>(7)</sup>。

要するに『講義要綱』においては、哲學というのは自然理性を利用する學問なのであって、他の分野の自然科學の學問と共通している所があるため、ただ學問と翻譯される場合が多い。また哲學者は學匠と翻譯されている場合があるが、學匠はしばしば、古代哲學者と古代中世神學者の翻譯でもありうる。

どちらかといえば、ヒロソヒアは自然哲學のことを言っており、哲學だけではなく物理學、生物學、學問のことも意味している。

ペドロ・ゴメズの『講義要綱』の和譯（1595年）と日本の宗教（ジラール）

哲學は他の學問と同じようにキリスト教の教會の信仰を知らない俗的な分野に屬しているからこそ異端性を免れる學問である。そういった點で、時々單に哲學は「學問」、哲學者は「學者」、あるいは古代哲學者と神學者を包括的に意味している「學匠」や「諸學匠」と翻譯され<sup>(8)</sup>、哲學は物理學など他の類似の學問と區別されていないのが1595年のイエズス會の辭典を参照すれば分かる。要するに、當時、哲學とは自然科學に他ならない<sup>(9)</sup>：*Physica, orum, sive Physica, ae. Lus. Philosophia natural. Iap.* 萬物の理の明むる學問。同、*Obra que trata da natureza das cousas. Iap.* 彼の學問をする教學。要するに、萬物の原理を追求し明らかにする學問である。

ちなみに、「ヒロソヒ」という語は十六世紀後半にかなり流布されていた。あまりに一般化されたためなのか、「ヒロソハル」という動詞まで作られている。これは動詞化された西洋語の初例と見られる。ヒロソハルというのは哲學すると言う意味で、この言葉は宇宙の原理を追求する意味で使われた例がある（『サントスの御作業』の和譯）<sup>(10)</sup>。

● ラテン語の *potentia* は「ポテンシア」として音寫されている以外に色々と翻譯の試みが見られる。

例としては次のような譯語が見られる。

－ 功能作用：能力。<sup>(11)</sup>

－ 精：力、能力、勢力：「勢」と混同された可能性がある。「故ニ、所作ヲ以テ即チホテンシアト云フ精ヲ知り、ホテンシアヲ以テ吾方ノ居リタルエセンシアト云フ體ヲ知ルゾ」というのは、その機能を通じて、能力 (*potentia*) と呼ばれるその力を知る事が出来、また、その能力を通じて個人側にある (*essentia*) と呼ばれるもの、そのものの本體自體を知る事が出来るというのである。それこそが本當の哲學である。<sup>(12)</sup>

エネルギー。「謂ク、即、火ニ熱精、雪ニハ冷ヤカナル精ヲ賦リ與ヘ玉ナリ。」と言うのは神が火に熱を雪に冷たさというエネルギーを與えてくれるのである。<sup>(13)</sup>

－ 精力：エネルギー的な力、能力。<sup>(14)</sup>

- 勢力 : *potentia* (*potentiis*). 能力 ; 動作、移動のダイナミックな力、能力。(15)
- 徳義 : 能力 (*potentiis*); 靈驗。(16)
- 精徳 : 性質、屬性、能力。(17)
- 作用 : *potentia*. 作用、作業、機能、能力。(18)
- 力作 : *potentia*. 「終リアルホルマハ、其體相、力作共ニ出ル所ノマテリアニ據ル者也。」目的を目指す形相はその實體的形相とその能力から出る物體に基づく。(19)
- 性徳 : 能力、自然的性質、性格 (四行の、ものごとの)。(20)
- 功能 : *virtualiter*. 能力、徳性、實力、實行力、機能。(21)「功能ヲ本トシテ」:  
*Principaliter, Formaliter*.

功能は可能性としてのポテンシャの翻譯の試みと見えるが、またスアンスの翻譯語でもある。實はアリストテレスの哲學ではポテンシアは可能であることと能力・力があることを意味しているので、文脈によって意味が異なるのであるが、翻譯する際にどちらかの意味に確定している場合がある。1595年の大辭典はスコラ派の *potentia* の意味を無視して普通名詞としての意味を取り、「司り」、「力」、「威勢」、「威光」と説明している。

● ラテン語の *acto* は「アット」と表記されている以外に、「作用」*operatio*. *Actus*. 「本體」*primus actus* も見られる。

- 作用 : 作用、作業、機能、(22) 現實態(23) (24)。この用語の使用法には多少の揺れがあることに注意したい。というのは、作用という語には作業、行動、活用、活躍という意味がありながら、既に見たようにポテンシアの翻譯語でもある。翻譯者は逐語的に翻譯する事を諦めて、主に文章の全體的な意味を通用させようとしたのか、或いは、トマス・アクイナスのポテンシアの解釋に従って靈魂のポテンシアは靈魂の作業原理であることを日本語で通用させようとしたのか、どちらかによると思われる。靈魂は本來は部分に分けることができないため、靈魂を分析する際には靈魂にいくつかの機能があることを認め、その機能のいずれかに着目して考察するという方法を取るのである。(25)

- 本體 : 第一の現實態。(26)



ペドロ・ゴメズの『講義要綱』の和譯（1595年）と日本の宗教（ジラル）

● 體（からだ）、身體の概念には少なくとも二重の意味がある。一方はアリストテレスの哲學に従って、アニマによって動かされて生かされている身體（*corpo*）という物質的な原理と理解される。もう一方ではキリスト教特有の解釋により、精鍊されて神の御意志に従う精神（*spiritus*）に對する、俗世界に執着する肉身（*corpo*）とも理解される。ただし、アリストテレスの靈魂論がプラトンの二元論で解釋されるため、結局、アリストテレス的な身體の概念はキリスト教的な身體の概念と混同される傾向にある。

そう言う點で、身體は「コルポ」という轉寫語が用いられ、二元論的な解釋の方へ向う場合が多い。そうでない場合は次のように翻譯されている。

－ 色體 *corpus* はアニマの反對語。「アニマ色體和合スル」、形相と物質の様に靈魂と身體が和合するというのである。<sup>(27)</sup>

－ 五體、五體身分、五體六根；全體：肢體をも含めた體全體と靈魂に象られている原理としても翻譯されている。

－ 形相、形身：身體；文字通りに形の姿、外貌、形の特性、特色。この用語は本來は佛教の用語であるとはいえ、佛教以外の文脈で物質や體という意味で用いているので、ガゴの翻譯原則にも反してはいない。<sup>(28)</sup>

－ 色身：身體の器官（*organo corporeo, organo corporeali*）；肉體的な體。<sup>(29)</sup> この言葉は佛陀の肉身、物質的な形ある身體を意味する佛教の用語ではあるが、佛教以外の文脈にも使われている。

－ 色相：身體、身體の要素、物質的、形と色を有するもの。佛教用語。<sup>(30)</sup> 「有ホトノ色相ソナハル物ハ」。<sup>(31)</sup>

－ 假相：人間の體。<sup>(32)</sup> 「次ニ、アニマハ和合ノ假相ニアラサレハ、其ハルテ分散シテ、滅スヘキ道理更ニナシ。」<sup>(33)</sup>

－ 色體：靈魂に對して身體をいう。「アニマ色體和合スル」。<sup>(34)</sup>

身體は靈魂に象られている原理としても翻譯されているが、參考までに、他の文獻では次の翻譯が見られる。この中には『講義要綱』の譯語と重なるものもある。

－ 五大：五行、日本では地、水、火、風、金。<sup>(35)</sup>

- 五體：感覺、身體全體。<sup>(36)</sup>
- 五體身分：肢體、分節をも含めた體全體。<sup>(37)</sup>
- 五體六根。<sup>(38)</sup>

● スコラ派の用語である *essentia*、*quiditas*、*substantia* に関しても音寫語と翻譯語の兩方の和譯のやり方が行なわれている。そういう場合にも、本來佛教語である言葉が、佛教の文脈を離れた一般的意味とみなされて、翻譯語として使用される傾向がある。例えば、

- 體：ものそのもの、ものの本體、本質。「故ニ、所作ヲ以テ即チホテンシアト云フ精ヲ知り、ホテンシアヲ以テハ吾方ノ居リタルエセンシアト云フ體ヲ知ルゾ。」<sup>(39)</sup>

- 正體：*quiditas*、*essentia*。<sup>(40)</sup> 實體的形相。「是ヲ以テアニマハ命根ノ作用ヲ施サンガ爲ニ、ソレソレノラルガンヲ具足シタルナツラル形相ノ正體ノ根本ナル事明也。是ヲホルマ ススタンシアルトモ云フ。アツツス ピリム [ス] ススタンシアリストモ云フ也。」 *anima est actus primus, id est (perfectio, vel forma substantialis) corporis physici (non artificialis, sed naturalis) organici (habentis varias partes, sive instrumenta, quibus vitae operationes exercent), quae definitio non solum competit rationali animae, sed de sensitivae & vegetativae, quolibet enim eorum est forma, et actus substantialis existens in corpore naturali, habense varias partes, quibus potest operationes vitae exercere, ut patet indicenti.*<sup>(41)</sup>

- 性體：實體、本體という意味もある。<sup>(42)</sup> 形相、實體的形相、第一現實態という意味も有る。<sup>(43)</sup>

- 正體：眞實の實體。<sup>(44)</sup> 實體、本質。「又、智慧分別ヲ具足シタル正體、無智性相ニ劣リテ消滅スヘキ謂レナシ。」<sup>(45)</sup>

● アリストテレス哲學の用語としての *forma* フォルマ形相は、

- 體相：實體的な形相。<sup>(46)</sup>「總ジテ、體相ヲハ其功能作用ヲ以テ見知り、作用、則チ其體相ノナツラヲ能ク顯ス者也ト。」<sup>(47)</sup>

ペドロ・ゴメズの『講義要綱』の和譯（1595年）と日本の宗教（ジラル）

－ 名乗：「質」に對して形相のことをいう。<sup>(48)</sup>

● *causa*（原因）は「カウサ」と音寫されているが、翻譯語としては、

－ 根元：原因。<sup>(49)</sup>：能動因の「和化」、質料因の「質」、形相因の「名乗」、目的因の「所用」となっているが根本という意味も有る。「マテリアトハホルマノ下地也。ホルマトハ物ノ性相ノ根元ナリ。」<sup>(50)</sup>

以上のように哲學用語が日本語で翻譯されている。

2/『講義要綱』には、獨特点な翻譯語、専門用語とも言える概念が幾つかある。また、佛教のテキストも含めて他のテキストにある言葉でも、『講義要綱』では決まった意味としてしか使われていない場合がある。例えば、

● 「情識」は頑固さ<sup>(51)</sup>のこと、ラテン語の *pertinacia* (*obstinatio*) に當たるが<sup>(52)</sup>、特に異端者の間違つた意見に耽ることを意味する點で、當時の普通會話で用いられていた「情識」の意味に似てはいるが、特殊な意味で取られている。また佛教での意味ともいささか異なる。

● 創造：*creatio*、創造、造化。「直ニ創造スル」（媒介者なく、直に、據り所なく創造すること）、*ex nihilo creare*。「デウス、直ニ御創造ナキニ於テハ、スピリツアル スタンシア出生スルト云事、曾テ不叶義也。故ニ、保命ノカラモデウス御一體ノミニ依持シ奉レハ、如何ナル御作ノ物ノ精力モ一命ノ爲ニイラサル也。」<sup>(53)</sup>

● 造化：作用、効果。例えば風にとって吹くこと。<sup>(54)</sup>

「造化」は四行などのあらゆる要素を混ぜ合わせて萬物を作ることであり、その主體は天である。<sup>(55)</sup>

キリスト教でいう創造 (*creatio*) は神が無から作ることをいうのであって、新しい概念であった。「造化」はものごとのお互いの作用をいうため、無からの創造とは異なる。

● 質：*natura*、ものの本質、性質。「天之質ハ如何ナル物ソト論スルニ」。<sup>(56)</sup> 同義語として「質體」もある。

*Causa materialis*、資料因、物質的な原因という意味もあれば<sup>(57)</sup> 名乗に對して

*Materia* 資料、質料という意味もある。(58)

● 不死不滅 : 不滅で永遠な靈魂 *immortalis et aeterna* (*anima intellectiva*): 不死で永遠な理性的靈魂の形容詞である。(59)

● 質體 : *materia*, 資料、質料、物質。「一者上一輪、即是諸層宿辰也。質體アリトイヘトモ、常住不易ノ體質ニシテ、清淨潔白ナル質也。」(60)

● 様體 : 天體の様體、外觀。(61)

● 和化 : *causa efficiens*, 能動因。(62)

● 所意 : 五根の機能。(63)

● 所用 : *causa finalis*, 目的因。(64)

● 約束 : *promissiones*, 約束。(65)

● 見聞嗅嘗觸 : 五根、五器官。(66)

● 報謝 : 五世における善惡の報い。(67)

● 總 : *in communi*, 總じて。(68)

● 別 : *in particulari*, 別して。(69)

● 世界 : 世界、世間、この世、地球。(70)

● 千尋 : 非常に深い。(71)

● 論理 : 論理、論法、辯舌の整理、調理。ラテン語の *dividitur* に当たることがある。(72)

● 科 : *vitio*, 横しまな態度、とが、罪。(73)

● 下知 : 意志、傾向。(74)

● 分別知覺 : *videre, intelligere*. 見ることと知ること、知性で知覺すること。(75)

● 間 : *medio*, 環境。(76)

● 居所 : *medio*, 環境。(77)

● 相似 : *convenientia*, 器官が對象に相應すること。(78)

● 不審 : *dubitationes*, 不審、疑問、懷疑。(79)

● 開解 : 決疑、疑問を解決すること (*dissolvuntur*)。 (80)

● 森羅萬象 : 創造物全體。(81)

● 進退 : 自由。(82)

ペドロ・ゴメズの『講義要綱』の和譯（1595年）と日本の宗教（ジラール）

- 自由：自由。<sup>(83)</sup>
- 糺す：追求する、求める、判明する。<sup>(84)</sup>
- 滅無：虚無。<sup>(85)</sup>
- 法則戒門：*praecepta prohibitates*, 禁止的な禁欲的な戒律。<sup>(86)</sup>
- 談義：福音を説法すること (*praedicando evangelium*); 教義を説くこと (*catechismo instructus*)。 <sup>(87)</sup>
- 談義者：説法者。<sup>(88)</sup>
- 憲法：*justitia*, 正義、公正。<sup>(89)</sup>
- 體：實體、實質。「一二ハ *humor cristal (l) ino* ト云テ、水晶ニ似ル體也。」<sup>(90)</sup>
- 和合：構成、構造、物體、實體。複合體、Port. *compleção*. 「此等ノコンヘレサンノ和合ハ濕熱多キ也。」<sup>(91)</sup>
- 勘辨：考慮すること、審査、検査、考察、観察すること。<sup>(92)</sup> *Intelligir*. 「是非得失ヲ勘辨スル爲ニ、分別智ヲ與ヘ玉フ如ク、物ヲ見ル爲ニ此ホテンシヤヲ與ヘ玉フ者也。」<sup>(93)</sup> 禪宗用語、特に『臨濟録』に出る。
- 道理：説明。*ex explicatione supra*. 右ノ道理ヲ以テ。<sup>(94)</sup>  
    について。<sup>(95)</sup>  
    *Licitum*, 正義、正しい、道理に従うこと。<sup>(96)</sup> 「非道」に對して云う。<sup>(97)</sup>
- 無理：*illicitum*, 不正義。<sup>(98)</sup> 道理の反對語。
- 子細：原因、理由、動機。<sup>(99)</sup> 「其外、御内證ニ不可思議ノ子細アリト知ヘシ。」<sup>(100)</sup>
- 究達：到着點、目的。到達點。「又人間ノアニマハ、色身ニ勝リタル靈明ノ體ナレハ、其究達色身ノ小樂ニモナキ者也。」<sup>(101)</sup>
- 全體：肢體をも含めた體全體。<sup>(102)</sup>
- 學德：*sciencia*, 學問。<sup>(103)</sup>
- 本體：第一現實態。<sup>(104)</sup>
- 逢著：對象を把握すること。<sup>(105)</sup>
- 存分：意見、判斷、申し立て、意向、意志。<sup>(106)</sup>
- 繁榮：*generatio, generativa*, 繁殖一種類の再生。<sup>(107)</sup>

- 分際：*capax (capacidade)* 能力。<sup>(108)</sup>
- 分量：*capax (capacidade)* 能力。<sup>(109)</sup>
- 智分：*capax (capacidade)* 能力。<sup>(110)</sup>
- 下地：*capax, capacitas (capacidade)* 能力、「物ヲ受クル下地」。<sup>(111)</sup>
- 相當：*convenientia* 相應性、適合性。<sup>(112)</sup>
- 似合：*convenientia* 相應性、適合性。<sup>(113)</sup>
- 體：存在、實在、存在そのもの、實體、本體。<sup>(114)</sup>

存在。「今身ノ亡フル事ヲ制シ止メ玉ハサル事ハ、未來ニ於テ勝レタル體ニナシ玉ハン爲也ト知レ。」<sup>(115)</sup>

實體、體質。<sup>(116)</sup>「又人間ノアニマハ、色身ニ勝リタル靈明ノ體ナレハ、其究達色身ノ小樂ニモナキ者也。」<sup>(117)</sup>

- 身：身體、人間の狀態。「今身ノ亡フル事ヲ制シ止メ玉ハサル事ハ、未來ニ於テ勝レタル體ニナシ玉ハン爲也ト知レ。」<sup>(118)</sup>

- 一類：類、種類。「自己」(個人)に對していう。「此ヘセタチワ 阿爾摩ハ三サマノ功能ヲナス也。一ニハ、自己ノ全體ヲ養育スル事。二ニハ、自己ノ全體ノ生長、開花、結實ノ功能ヲナス事。三ニハ、一類ノ繁榮ヲナス功能ノ事。」<sup>(119)</sup>

3/ 日本の思想・宗教の概念を用いて、ラテン語版の語を言い換えていたり、ラテン語版にはない説明を付け加えていたりする場合がある。

例えば、ラテン語版では世俗の習慣、風習と書いている所を、和譯版では儒教思想の概念で「三綱」<sup>(120)</sup>や「五常」<sup>(121)</sup>と書いていることがある。

- 三綱：君臣、父子、夫婦の結びつき。現世の世俗的な道德、倫理。<sup>(122)</sup>
- 五常：仁義禮知信。現世の世俗的な道德、倫理。<sup>(123)</sup>
- 神明佛陀：邪教としての崇拜對象の神々と佛。<sup>(124)</sup>

ラテン語本にない日本宗教の用語を使っている例として「餘人は眞實の御作者を見知り奉らずして、神明佛陀を天地創造の主と心得て現當二世の祈りをなすこと、言語道斷愚癡の罪科、是に過ぎたる事有るべからず」や「却って佛神に禮拜をなす事は罪科也」などがある。

ペドロ・ゴメズの『講義要綱』の和譯（1595年）と日本の宗教（ジラル）

また、切支丹は自分の宗門のしるし（験）として異端者の衣裳を着てはいけないというのはラテン語本にもあるが、その具體的説明として、出家の袈裟や山伏の篠懸（すずかけ）を着ることは叶わないとする文章が和譯本では付け加えられている。<sup>(125)</sup> こうしたところに宗教的適應の意圖が見られる。

● 靈魂のことは大抵 *anima* アニマとして音寫されているが、イエズス會の辭書では、

－ 靈魂：靈魂。<sup>(126)</sup>

－ 魂：靈魂。「膽、魂ヲ消ス」、驚くこと。「魂、身ニ沿ワズ」、驚く、或は理性を失う、氣が狂う。<sup>(127)</sup> 1595年の辭書ではラテン語の *anima* の翻譯となっている。<sup>(128)</sup>

－ 命魂：*anima*。「有情非情ノ命魂トナルモノ」。<sup>(129)</sup>

－ 靈神：靈魂（佛教）、或は神の靈魂、場合によっては奇跡を行なう神。<sup>(130)</sup> という日本人の宗教思想に合う翻譯が見える。『講義要綱』の中では翻譯語として、

－ 靈體：精神的な本體。<sup>(131)</sup>「預カラサレハ不滅ノ靈體也ト明ニ知レタリ」。<sup>(132)</sup> 靈魂の様な不可思議で精神的な物體。<sup>(133)</sup>

－ 靈明：超自然的なもの、精神、靈魂。「人間ノアニマハ是ラシヨナルナレハ、曾テ色相ヨリ生セス。其ユヘハ、彼アニマハ諸ノ色相ニ越ヘタル殊勝靈明ノ正體ナレハ也。總シテアセンテモ自分ニ超過シタルエヘツトヲ施與スル事叶サル者ナルカ故ニ、アニマハ色相ヨリ亡サルルト云事、曾テナキ者也」。<sup>(134)</sup>「又人間ノアニマハ、色身ニ勝リタル靈明ノ體ナレハ、其究達色身ノ小樂ニモナキ者也」。<sup>(135)</sup>

－ 尊靈：尊い人や死者の靈魂或は精神。<sup>(136)</sup>

－ 靈：死者の靈魂或は精神。<sup>(137)</sup>

－ 心身：心と身、靈魂或は精神と身體。<sup>(138)</sup>

－ 色心：身體と靈魂。<sup>(139)</sup>

－ 身心：身體と精神或は靈魂。<sup>(140)</sup>

他には、

● 異靈：地震、雷電、臺風等の超自然な現象。(141)

● 甘露：*manna*、春頃にシナイ山脈に生産している *Tamarisc Manifera* という樹から出ているシロップの一種。天から與えられた食べ物。(142)  
という例があり、現地信仰を無視出来なかったことを示している。

4/ キリスト教の概念が、漢語を使用しないで大和言葉で表現されている場合がかなりある。その好例として、スコラ哲學認識論のスペシエス (*species*) は、物自體と、認識している主體との間におかれているしるしであって、それは佛教の法相唯識で言う「相」に当たるといえるが、佛教用語は使用されず、國字の「佛」で巧く表現されている。(143)但し、時々、面影は *species* を翻譯する爲にも使われている。場合によって「寫」という翻譯語も使われている。「此緣天治面度ハ萬物ノ體ノ寫ヲ受テ分別スルホテンシア也。」(144)

● 物：存在するもの、もの。「ヲンタテ、物ニ大切ヲ運フ所作用限りナキ也。」(145)

● 者：個人。(146)

● 眞：眞理、眞實。(147)

他の例としてトマス・アクイナスの十一の煩惱のリストは大和言葉で翻譯されている。これは、恐らく通事の翻譯のリストによるものであろう。

● 人間の貪欲的欲求の煩惱：

- 大切ノ事：*amor*. 愛。
- 望ム事：*desiderio*. 欲求、欲望。
- 悦フ事：*gaudio*. 喜び。
- 憎ム：*odio*. 憎み。
- 退ク事：*fuga*. 逃げること。
- 悲シム事：*tristitia*. 悲しみ。

● 人間の嘖恚的欲求の煩惱：

- 頼ミ：*spes*. 期待。



ベドロ・ゴメズの『講義要綱』の和譯（1595年）と日本の宗教（ジラール）

- 恐レナキ事 : *audacia*. 大膽さ。
- 頼敷ヲ失フ事 : *decepção* (*desperatio* と混同されている). 失望、絶望。
- 恐ルル事 : *timor*. 恐れ。
- 怒ル事 : *ira*. 怒り。

中でも重要なのは、ラテン語の *amor* アモルの譯語を、愛、戀愛、憐れみ、世俗的な愛などと混同しないように選擇したと思われることである。そうすることで翻譯者は上手に佛教用語を避けることが出来たと見られる。

5/ しかし、ガゴの原則をどうしても守れない場合、佛教用語を使わざるを得ない例がかなりある。

- 有情 : 感情、感性、意識のある生き物。(148)
- 非情 : 植物、金石物、天球等のことをいう。生命力や靈魂のないもの。(149)
- 分別 : 知性、理性。理解すること、善悪を區別すること。分別者 : 賢く知識のある人。(150)
- 分別 [ス] : *intelligere*, 知覺する、理解する。(151)
- 分別智 : *intellectus* ; 知覺、知性。辨える知性。「是非得失ヲ勘辨スル爲ニ、分別智ヲ與ヘ玉フ如ク、物ヲ見ル爲ニ此ホテンシャヲ與ヘ玉フ者也。」(152)
- 罪業 : *humana generatis miseria*、人類の悲惨さ、不幸。(153) このキリスト教の概念は罪深い業を擔っている人間の悲惨な、不幸な状態を形容している。他にも「凶惡」と翻譯されている。(154)

日本の佛教でよく使用する「心身」という語が、イエズス會の辭書には出ているが、(155)『講義要綱』の中には、同じ意味で道元がよく使う「身心」（身體と精神・靈魂）も靈魂の翻譯語として用いられる。これは曹洞宗の影響であろうか。(156)

- 加護 : *ajuda, protectio* (?) 助け、援助、保護。「デウスノ御加護ヲ蒙ル。」  
「生得不滅ニ御作ナサレタル者ヲハ、同ク御加護ナサル者也。」(157)
- 嗔恚 : *ira, aversio*, 怒り、嫌惡。典型的な佛教用語である。(158)
- 圓成 : *perfectio*, 完璧さ、完全さ。(159)

- 了簡：計り、計量、調整。(160)
- 究竟：到達點、到着點、目的。(161)
- 觀門：精神觀察。(162)
- 商量：判斷する、測る、測量する。(163)
- 端的：即座に、その場で、直に、端的に。(164)
- 不退：永遠に、永久に。(165) これは佛教の菩薩道の重要な概念であるが、キリスト教の文脈では永遠にというふうには積極的な意味で理解されている。
- 虛空法界：全宇宙、無限な虛空、空間；天と地との間の虚無な空間の様に際限もない空間。(166) これは佛教用語の様に見えるが、佛教でもあまり見かけない言葉である。
- 因緣：原因。「又、其カウサノ因緣ヲ尋ネ探リテ、根本ノカウサヲ見付サル間ハ、終ニ休息スル事ナシ。」(167) 起こること、起こる事情という意味もある (*contingant*)。(168)
- 本源：原理、源流。(169)
- 境界：*objectum*、對象、客體。(170)
- 分別 [ス]：*intelligere*、理解すること、知覺すること。(171) 知ること。(172)
- 功德：*mereri*、功德。(173)
- 無功德：*demereri*、無功德、非功德。(174)
- 依持 (持)：依る、據り所とする。「デウス、直ニ御創造ナキニ於テハ、スヒリツアル ススタンシア出生スルト云事、曾テ不叶義也。故ニ、保命ノカラモデウス御一體ノミニ依持シ奉レハ、如何ナル御作ノ物ノ精力モ一命ノ爲ニイラサル也。」(175)
- 變成：*transformatio*、變化。身體に於ける食べ物の消化。
- 分身：*pars, partis, parte*、部分、分身、分化されたもの。(176)
- 分段：*pars, partis*、部分、制限されているもの。(177)
- 殊勝：勝れている、聖なるものの形容詞。(178)「殊勝ノ事」、「人間ノアニマハ是ラシヨナルナレハ、曾テ色相ヨリ生セス。其ユヘハ、彼アニマハ諸ノ色相ニ越ヘタル殊勝靈明ノ正體ナレハ也。總シテアセンテモ自分ニ超過シタルエヘツトヲ施與スル事叶サル者ナルカ故ニ、アニマハ色相ヨリ亡サルルト云事、曾

ペドロ・ゴメズの『講義要綱』の和譯（1595年）と日本の宗教（ジラル）

テナキ者也。』<sup>(179)</sup>

● 内證：内面、内證、意圖、意匠、意志、意向。<sup>(180)</sup> 御内證はデウスの意向、意匠のことをいう。「其外、御内證ニ不可思議ノ子細アリト知ヘシ。」<sup>(181)</sup>

● 無智：*ignorantia*、「又、智慧分別ヲ具足シタル正體、無智性相ニ劣リテ消滅スヘキ謂レナシ。」<sup>(182)</sup>

● 性相：*natura*、性質、性格、本質の特色。「又、智慧分別ヲ具足シタル正體、無智性相ニ劣リテ消滅スヘキ謂レナシ。」<sup>(183)</sup>

● 勘辨：考察、洞察、觀察、理解する。前記。<sup>(184)</sup>

また、浄土教の民間信仰的な阿彌陀、浄土信仰と関係のありそうな言葉として、

● 後生：來生、救済、永遠なる極樂の生命。<sup>(185)</sup>「後生の初門」、永遠なる生命に入ること。*(inchoatur vita aeterna)* <sup>(186)</sup>; *Non justificatur homo nisi per fidem Iesu Christi*. 「キリストノヒイテスナクシテ後生ヲ扶カル事ナシ。」<sup>(187)</sup>

● 後生方ノ義：神の正義、神聖なる法律、権利「ナツラノ事」（自然法律、権利）の反對語として見える。<sup>(188)</sup>

● 妄念：*error*、知識的な間違い。<sup>(189)</sup>

● 邪惡：よこしまな行動。<sup>(190)</sup> 過失。<sup>(191)</sup>

● 教化：知らせること、教えること、教訓。<sup>(192)</sup>

● 照覽：注意して觀察すること (*intueor*)。「心ノソコヲハデウスノミ御照覽ナサルレハ」、*(solum in Deo intueor cor)*.<sup>(193)</sup>

● 覺悟：*consciencia*、良心、善惡の意識。覺悟。<sup>(194)</sup> 準備、支度。資材。<sup>(195)</sup>

● 智：*intelligentia*、知性。<sup>(196)</sup>

● 智慧：*intelligentia*、智慧、知性、理性。<sup>(197)</sup> 學問、學識、知識。Pagès, p. 774. 「又、智慧分別ヲ具足シタル正體、無智性相ニ劣リテ消滅スヘキ謂レナシ。」<sup>(198)</sup>

● 智惠：*ratio*、理性、知性。「談義者ニモ是非得失ヲ辨ユル程ノ智惠アル人ニハ談義ヲ説ク事、デウスヨリ御赦免アル也。」<sup>(199)</sup>

● 計イ：*Providencia*、攝理、運、運行、ものごとの調理、調節。<sup>(200)</sup>

● 和合：前出。「四大和合ノエセン」、「アニマ色體和合スル」。(201)「次ニ、アニマハ和合ノ假相ニアラサレハ、其ハルテ分散シテ、滅スヘキ道理更ニナシ。」(202) 複合體。Port. *compleção*. 「此等ノコンヘレサンノ和合ハ濕熱多キ也。」(203)

● 輪廻：言葉の繰り返し。論法の無駄な繰り返し。生死の意味が無い。(204)

● 縁スル：対象を把握し、認識すること。(205)

● 行儀：ガゴの翻譯原則に従う爲に、行住坐臥という佛教の術語を出来るだけ避けて同音の語で大體同義の「形義」、「形儀」、「行義」が道德、倫理、世間的な習慣、風習、という意味で使われている。(206)

● 執着：物質的な執心。貪着：精神的な執心。共にいい意味で用いられており、佛教語での使い方と多少違う。

● 正念：明らかで正しい判断。「臨終正念」、「時トシテハ、身終ルマテ正念、利オナル者は多シ。」(207)

● 一心：*unica anima*：人間に幾つかの靈魂が備わっているといっても、靈魂自體が一體のもの、唯一のものだということを主張する見方。(208)

● 無爲安樂：*felicitem*, 後世の永遠なる極樂の状態の形容詞。(209)

特筆すべきことの一つは、完全にガゴの翻譯の原則を無視した例もあることである。即ち、次のような例である。

● 俗諦ノ色：俗諦に屬する身體、肉體。ラテン語に無い言い回し。(210)

● アニマノ眞諦：靈魂に關する眞諦。ラテン語に無い言い回し。(211)

日本語の文章は次の通りである。「人ハ罪業ノ散亂ニ洩レテ癡惑深思ナルカユエニ、俗諦ノ色スラ尙辯セス。何ソ況ヤ、アニマノ眞諦ニ於テラヤ。」

アリストテレスの哲學では靈魂の無い身體も、身體の無い靈魂も無い筈であるが、ここでは、身體・肉體という意味の佛教用語の「色」を佛教の二諦の俗諦と同視して、精神という意味の靈魂アニマを佛教用語の眞諦に當て嵌めてしまっている。これは相當大膽なやり方であるというほかない。

勿論、これはラテン語のテキストにない對比のしかたである。ラテン語版では人間の本性は、自分の中にある最も深い内面のものをみるのに、先ず、自分

ペドロ・ゴメズの『講義要綱』の和譯（1595年）と日本の宗教（ジラル）

を暗闇の中におかなければいけないという憐れむべき状況のもとにあるものである。従って自分の中の最も内なる靈魂を知ることは難しい。しかし、明快な眞理に基づいて靈魂は何であるかを述べ、その上で靈魂の能力と作用を明らかにすることは、何の差し支えもない。即ち、アリストテレスによれば、靈魂というのは生命力を可能な限り發揮出来る自然世界の者の第一根本原理である。

ラテン語版では人間の力不足、弱さを指摘していても、その能力は否定されていないどころか、かなりオプチミスティックに認識の力に期待している言い方が使われている。

和譯本では人間は罪業の中で深く迷い、惑わされている。従って、現世の形のあるものについての眞實すらわからない。ましてや精神からなっている第一の眞理においてをやである。このように宣言した上で、「しかしながら、アリストテレスの『靈魂論』の中での靈魂についての見解をここで述べて、彼の一點一點の解釋に着目し、詳細に靈魂の機能と作用を論ずることにしたい。」と述べ、アリストテレスの『靈魂論』を解説してゆくのである。

和譯本では、人間は徹底的に無能なものであって、完全に眞理を見ることは出来ないという。その表現のしかたは、多少、親鸞的、『歎異抄』的な、人間性を悪とするペシミスティックな人間の条件を提示していることが際立つ。

『靈魂論』の和譯の冒頭部分を見ると、翻譯者は始めから、佛教の非常に重要な用語を使っている。どちらかといえば、ペシミスティックで二元論的な方向へ導く翻譯である。本来、アリストテレスの説くところは、靈魂が生命の基本的な原理であると同時に、身體なくしては靈魂は存在し得ず、靈魂無しでは身體は存在し得ないということであり、両方とも互いに不可離な関係にある。ところが、和譯ではアニマとスピリツス、身體と肉體を混雜して、始めから、體即肉體即世俗・アニマ即精神即第一眞理という、アリストテレスの説から外れた、佛教の二諦説とプラトンの二元論とを混同した解釋が出されており、それが當時の日本のキリスト教の理解、すなわち、キリスト教を佛教的に理解する方向へ導いたとも思われる。



ベドロ・ゴメズの『講義要綱』の和譯（1595年）と日本の宗教（ジラルール）

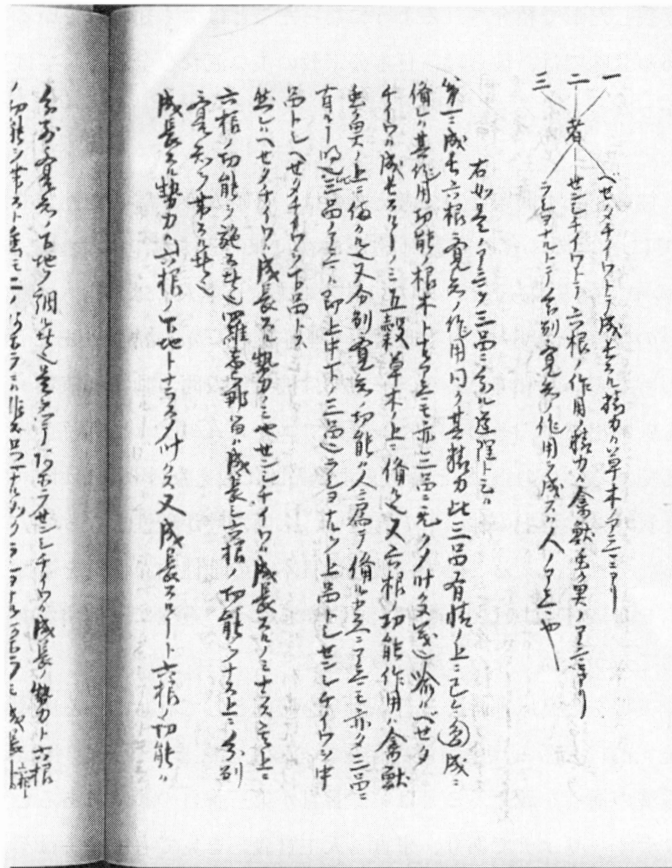
像から變貌した形で紹介されるようになったことはよく知られていることであるが、ある意味では、彼らは、日本の宗教の主な流れを全體としては見逃してはいなかったとも言えるところもある。

但し、彼らが基本問題として考えたのは、日本人の矛盾した性質である。それはすでにイエズス會の宣教師達が最初に來日した際、いわゆる山口討論（1552）の中で圖らずも表れていた。すなわち、日本人には外國人、特に理屈っぽく争いの好きな印度人よりも理性力・理解能力（*rationalis*）があると、ザヴィエールの時からいわれているが、一方では彼らは人間と動物・植物・金石物との違いを區別出來ず、そのことが一種のアニミズムのように理解されたに違いないことである。その爲に、とりあえず優先的に教えなければいけないことは、人間の性質が自然世界の他のものと違い、人間だけが理性をもっていることなのである。それを教えることで、彼らは日本人の理性的な性質を發揮させ、アニミズムを打破させようとしていた。だからこそ、靈魂に三種類があることを證明することが急務となっていたのである。

太極や天理を最高原理とする哲學體系を確固として有している中國人に對しては、優先的に天帝・天主が最高存在であることをまず教えなければならず、人間の靈魂の構造を教えることは第二番目か第三番目の義務であると感じていたのがマテオ・リッチであり、事實『天主實義』を見ても靈魂論は第三章にしか出てこない。

それに対して日本では、スコラ派の形而上學體系を一番始めに教えるよりも、むしろ靈魂の構造を分からせることで、人間の性質が何らかの形で自然の世界、宇宙の原理と繋がることを理解させることができ、人間としての救いも保證し得るという確信があったに違いない。このような考え方は彼らの日本宗教の理解の仕方が基になっていた。

今回扱ったこの膨大な『講義要綱』の幾つかの問題點が、當時の日本宗教の世界にどのように受け入れられ、影響をあたえ、また反應されたか、このことは筆者のこれからの研究課題の一つだと思っている。



三靈魂 (植物靈魂・感覺靈魂・理性靈魂)

〈キーワード〉 Soul (anima), Jesuits, Aristotle, Buddhism

参考文献. Frédéric Girard, Ecole Française d'Extrême-Orient.

Additiones ad Dictionarium Iaponicum, Auctore Fr. Didac Collado Ordinis Praedicatorum, 1632.

Aristote : De l'âme, Traduction nouvelle et notes par J. Tricot, Bibliothèque des textes philosophiques, Librairie philosophique J. Vrin, Paris, 1969 ; Nouvelle édition., 2003.

Aristote : De l'âme, Traduit du grec par Pierre Thillet, Edition établie, présentée et annotée par Pierre Thillet, Folio essais, Inédit, Gallimard, Paris, 2005.

Asami, Masakazu 浅見雅一 : Kirishitan jidai no gūzō sūhai キリシタン時代の偶像崇拜 (L'



ベドロ・ゴメズの『講義要綱』の和譯（1595年）と日本の宗教（ジラルル）

- idolâtrie à l'époque chrétienne*, Tōkyō daigaku shuppankai 東京大學出版會, Tōkyō, 2010.
- Aubenque, Pierre : *Problèmes aristotéliens, Philosophie théorique, Histoire de la Philosophie*, Vrin, Paris, 2009.
- Belleforestus, G. Franciscus (1530-1583) : *L'Histoire Universelle du monde*, Paris, 1570.
- Cassirer, Ernst : *Descartes, Corneille, Christine de Suède*, Vrin, Paris, rééd. 1997.
- Cieslik, Hubert : « The Training of a Japanese Clergy in the Seventeenth Century », dans *Studies in Japanese Culture : Tradition and Experiment*, Edited by Joseph Roggenendorf, Monumenta Nipponica Monographs, n° 23, Sophia University, Tōkyō, pp. 41-78. 1965.
- Cooper, Michael : *They Came to Japan, An Anthology of European Reports on Japan, 1543-1640*, Edited by M.C., S.J., University of California Press, Berkeley and Los Angeles, 1965, XIV + 439 pages.
- Cooper, Michael : *Rodrigues The Interpreter, An Early Jesuit in Japan and China*, New York-Weatherhill-Tokyo, 1974, 416 pages.
- Crasset, Jean, R.P. de la Compagnie de Jésus : *Histoire de l'Eglise du Japon*, 1689, 2e édition A Paris chez François Montalant, vol. 2 1715 (2 vol. Paris 1641).
- Dehergne, J. : *Répertoire des Jésuites de Chine, de 1552 à 1800*, Paris, Letouzey et Ané, 1973.
- Debergh, Minako : « La première évangélisation du Japon au XVIe siècle : caéchismes sommaires, prédications, catéchèse graduée », in *Actes du 10<sup>e</sup> Congrès national des Sociétés savantes*, Dijon, 1984, Section d'Histoire moderne, II, Paris, 1984, pp. 175-209.
- Idem* : « La théologie et la pratique de la pénitence des missions jésuites au Japon, 1549-1610 », in *Actes du 10<sup>e</sup> Congrès des Sociétés savantes*, Brest, 1982, 1 : La faute, Paris, 1984, pp. 463-476.
- Dictionarium latinum Lusitanicum ac Japonicum ex Ambr. Calepini volumine de promptum etc. In Amacusa*, 1595. In 4° O.18<sup>L\*</sup>. Bibliothèque de l'Institut de France, Paris.
- Dictionarium sive Thesavri Lingvae Iaponicae Compendivm, Compositum, & Sacrae de Propaganda Fide Congregationi dicatum à Fratre Didaco Collado Ord. Praedicatorum Romae, anno 1632*, Romae, Typis & impensis Sac. Congr. de Prop. Fide, MDCXXXII, Superiorvm Permissv., *Raseinichi jiten* 羅西日辭典 [*Dictionnaire Latin-Espagnol-Japonais*], de Diego Collado, édité par Ōtsuka Mitsunobu 大塚光信, Rinsen shoten 臨川書店, Kyōto, 1966.
- Ebisawa Arimichi 海老澤有道 : *Nanban gakutō no kenkyū* 南蠻學統の研究 [*Études sur le système du savoir des Barbares du Sud*], Sōbunsha 創文社, Tōkyō, 1958, 5 + 512 + 30 pages.
- Nicolas De Fer : *L'Atlas Curieux où le Monde représenté dans les cartes générales et particulières du Ciel et de la Terre* 1700, rééd. 1705.
- Frank, Bernard : L'intérêt pour les religions japonaises dans la France du XIXe siècle et les collections d'Emile Guimet, Essais et conférences du Collège de France, Paris, 1986.

*Idem* : *Le panthéon bouddhique au Japon - Collections d'Emile Guimet*, Réunion des Musées nationaux, 1991, Paris.

*Idem* : « Une iconographie japonaise connue dans l'Europe du XVI<sup>e</sup> siècle à partir d'une faute de traduction, et sa réalisation ludique sous forme sculptée à notre époque », *Comptes rendus de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres*, Paris, 1996, pp. 783-797.

Fróis, Luis : *História de Japam*, ed. by José Wicki, 5 vols, Lisbon, Biblioteca Nacional de Lisboa, 1976-1984.

Fumaroli, Marc : *L'âge de l'éloquence, Rhétorique et «res literaria» de la Renaissance au seuil de l'époque classique*, Droz, Genève, 2002.

Gay, Jesús López : « La mariología en un ms teológico del Japón del siglo XVI », in  $\Delta$  ακονία π σέως, Biblioteca Teológica Granadina, 13, Granada, Facultad de Teologia, 1969, pp. 257-278.

Gernet, Jacques : *Chine et christianisme, Action et réaction*, Bibliothèque des histoires, NRF, Éditions Gallimard, 1982.

Girard, Frédéric :

« En quel sens peut-on parler de philosophie au Japon ? », *Cipango, Cahiers d'études japonaises*, Paris, n° 2, 1993, pp. 115-123.

« Discours bouddhiques face au christianisme », *Repenser l'ordre, repenser l'héritage, Paysage intellectuel du Japon (XVIII-XIXe siècles)*, dirigé par Fr. Girard, A. Horiuchi, M. Macé, EPHE, IV<sup>e</sup> section, Droz, Genève, 2002, pp. 167-208

« Les *Dialogues sur le confucianisme et le bouddhisme (Jubutsu mondō)* : ou la critique du bouddhisme par Hayashi Razan face à Matsunaga Teitoku, *Japon Pluriel* 5, Actes du cinquième colloque de la Société française des études japonaises, Édition établie par Pascal Griolet et Michael Lucken, Éditions Philippe Picquier, Paris, 2004, pp. 83-93.

« *Réfutation de la doctrine pernicieuse : Sessō et les moines de son époque* », *Actes du Troisième Colloque d'études japonaises de l'Université Marc Bloch, La Rencontre du Japon et de l'Europe, Images d'une découverte*, Strasbourg-Colmar, 8-11 décembre 2005, sous la direction de Sakae Murakami-Giroux, Publications Orientalistes de France, Centre Européen d'Études Japonaises d'Alsace, Département d'Études japonaises de l'Université Marc Bloch, Strasbourg-Colmar, 2007, pp. 109-121.

*Vocabulaire du bouddhisme japonais* 日本佛教語彙集, École Pratique des Hautes Études, Sciences Historiques et Philologiques, II, Hautes Études Orientales - Extrême-Orient 9, 45, Droz, Genève-Paris, 2008, XLIX + 1658 pages.

« Collèges jésuites dans le Japon des XVI<sup>e</sup> et XVII<sup>e</sup> siècles », dans *Centre et Périphérie, Approches nouvelles des orientalistes*, Actes du Colloque organisé par l'Institut du Proche-Orient Ancien et du Collège de France, la Société Asiatique et le CNRS (UMR 7192) les 31 mai et 1<sup>er</sup> juin 2006, Paris - Collège de France, Cahiers de l'Institut du Proche-

ペドロ・ゴメズの『講義要綱』の和譯（1595年）と日本の宗教（ジラル）

Orient du Collège de France, I, Librairie d'Amérique et d'Orient, Jean Maisonneuve, Paris, 2009, pp. 371-394.

« La conception des Buddha selon les Jésuites aux XVIe et XVIIe siècles » (*Jūroku seiki kara Jūnanaseiki made no iesusu-kai no Nihon no Buddakan*, Japanese Studies around the World, 2008, Scholars of buddhism in Japan : Buddhist Studies in the 21th Century, The Ninth Annual Symposium for Sc holarls Resident in Japan, Edited buy James Baskind, Internationla Research Center for Japanese Studies, Kyōto, March 2009, pp. 79-85.

« *Kirishitan jidai no kirishitan hihancho, Sessō Sōsai no Taiijishūron to Kōfukuji hikki wo chūshin ni* » (« Les critiques du christianisme au Siècle Chrétien, La Réfutation de la religion erronée et les Notes du Kōfukuji de Sessō Sōsai »), dans *Kirishitan bunka to Nichiō kōryū* (*Culture des Chrétiens et échanges culturels entre le Japon et l'Europe*), recueilli par le professeur Komine Kazuaki, Benseishuppan, Tōkyō, 2009, pp. 172-180.

« Aristote au Japon : La version japonaise du *Compendium de Gomez* », *Le regard éloigné*, ouvrage dirigé par François Lacadud et Dejanirah Couto, Études thématiques de l'École Française d'Extrême-Orient, 2010, pp. 25-37.

Gómez, Pedro (1535-1600) : *Compendium Catholicae Veritatis, in gratiam Iapponicorum fratrum Societatis Iesu, confectum per Rdum. Patrem Petrum Gómeziū Vice-Provincialeū Societatis Iesu in provincia Iapponica.*

Gonoï Takashi 五井隆史 : *Nihon kirisutokyō shi* 日本キリスト教史 [*Histoire du christianisme au Japon*], Yoshikawa kōbunkan 吉川弘文館, Tōkyō, quatrième édition, 2001, 310 + 12 pages.

Goro Kaneko 金子悟郎 : *Amakusa gakurin* 天草學林 [*Le Collège d'Amakusa*], Amakusa minpōsha 天草民報社, Kumamoto, 2001, 203 pages.

Gusman, Luis de : *Des Missions que les religieux de la Compagnie de Jésus ont faites, pour prêcher le Saint Evangile dans l'Inde orientale et dans les royaumes de la Chine et du Japon*, 1601.

Hiraoka Ryūji 平岡隆二 : *Nanban uchūron ni okeru Kuravius - Gomesu* «*Shingaku yōkō*» *chū no tenmongakuteki sūchi wo megutte* - 南蠻宇宙論に於けるクラヴィウス——ゴメス『神學要綱』中の天文學的數値をめぐって——, *Kagakushi kenkyū* 科學史研究, vol. 47, n° 246, été 2008, pp. 95-107.

Humbertclaude, Pierre : « Myōtei mondō, Une apologétique chrétienne japonaise de 1605 », *Monumenta Nipponica*, Sophia University, Volume I, n° 2, 1938, pp. 515-548, Volume II, n° 1, 1939, pp. 237-267.

*Idem* : « Notes complémentaires sur la biographie de l'ex Frère Jésuite Fabien Fucan. » *Monumenta Nipponica* Volume IV, n° 2, 1941, Sophia University, Tōkyō, pp. 291-295.

*Idem* : « Investigações sobre um Catálogo de livros pertencentes à Procura do Japão em Macau, em 1616 », in *Boletim Eclesiástico da Diocese de Macau*, Nr 449, 1941, pp. 147-161.

- Imamura Yoshitaka 今村義孝 : *Amakusa gakurin to sono jidai* 天草學林とその時代 [Le Collège d'Amakusa et son époque], Amakusa bunka shuppansha 天草文化出版社, Hondo 本渡, 1990, 307 pages.
- Itō, Shuntarō 伊東俊太郎 : Arisutoteresu to Nihon - waga kuni ni okeru seiōteki sekaizō no saisho no juyō - アリストテレスと日本——我が國における西歐的世界像の最初の受容 ( « Aristote et le Japon - la première réception de l'image occidentale du monde au Japon - ), Tōkyō daigaku kyōyō gakubu Kyōyōgakkka kiyō 東京大學教養學部 教養學科紀要, n° 1, mars 1968, Tōkyō, pp. 1-45.
- Jacques, Roland : *Des nations à évangéliser, Genèse de la mission catholique pour l'Extrême-Orient*, Droit canonique, Droit civil ecclésiastique, Les Éditions du Cerf, Paris, 2003.
- Junshin joshi tanki daigaku 純心女子短期大學, Nagasaki chihō bunkashi kenkyūjo 長崎地方文化史研究所, *Nagasaki no korejo* 長崎のコレジョ [Le Collège de Nagasaki], Junshin joshi tanki daigaku 純心女子短期大學, Nagasaki, 1985, 270 pages.
- Kanzaki Shigeru 神崎繁 : Tamashii no ichi - Jūnanaseiki, Higashi Ajia ni okeru Arisutoteresu Konron no juyō to hen.yō 靈の位置——十七世紀東アジアに於けるアリストテレス魂論の受容と變容—— ( « La place de l'âme - Accueil et métamorphoses du De Anima d'Aristote dans l'Asie orientale au XVIIe siècle - », Chūgoku - Shakai to bunka 中國——社會と文化, Tōkyō daigaku chūgoku gakkai 東京大學中國學會, Tōkyō, n° 19, 2004, pp. 31-55.
- Kircher, Athanasius : *Oedypus Aegyptiacus*, trois tomes, 1652-1655.
- Leyna, Buxada de : *Historia del Reyne de Iapon*, récapilada por el Doctor Buxada de Leyna, vezino de la ciudad de Toledo ; Dirigida al Doctor Diego Clavero, des Real Consejo de su Magestad, en el Reyno de Arago. 1691.
- Lexicon Latino-Iaponicum Derpompum ex Opere Cuititulus Dictionarium Latino-Lusitanicum ac Iaponicum typis pimum mandatum in Amacusa in Collegio Iaponico Societatis Iesu anno Domini M.DMXCV. Nunc denuo Emendatum atque auctum a Ciario Apostolico Iaponiae*, Romae, Typis S.C. de Propaganda Fide Socio Eq. Petro Marietti Admin. MDCCCLXX.
- Macray, William Dunn : *A register of the Members of St Mary Magdalen College*, Oxford, From the Foundation of the College, New Series, vol. IV, Fellows, 1648-1712, by William Dunn Macray, M.A., Hon. D. Litt., F.S.A. fellow rector of Ducklington, Oxon, London, Henry Frowde, Oxford University Press Warehouse, Amen Corner, E.C., 1904.
- Manesson Mallet, Allain : *Description de l'univers (de 1683) contenant les différents systèmes du monde, les Cartes générales et particulières de la Géographie ancienne et Moderne : les plans et les profils des principales villes et des autres lieux plus considérables de la terre ; avec les Portraits des Souverains qui y commandent, leurs Blasons, titres et Livrées : et les Moeurs, religions, Gouvernemens et divers habillemens de chaque Nation, dédiée au Roy. Tome quatrième*, A Paris, chez Denys Thierry, rue Saint Jacques.
- Moran, J. F. : *The Japanese and the Jesuits, Alessandro Valignano in sixteenth-century Japan*,

ペドロ・ゴメズの『講義要綱』の和譯 (1595年) と日本の宗教 (ジラル)

Routledge, London and New York, 1993, réédition 2001, 2005, 238 pages.

Murdoch J., And Yamagata I., *A History of Japan during the Century of Early Foreign Intercourse*, London, 1949.

Obara, Satoru : « Acceptance, Rejection and Transformation. Christianity and the Historical Climate of Japan » (Tokyo, Kirishitan Bunko, Sophia University, 1994, 1-54. Original en japonais, Kirishitan Bunko, 1978.

*Idem* : « Jesuit Education in the Kirishitan Period : Francis Xavier's Longing for a College in the Capital », Tokyo, Sophia University, Kirishitan Bunko, 1989.

Obara Satoru 尾原悟 : *Iesusukai Nihon korejo no Kōgi yōkō I* イエズス會日本コレジヨの講義要綱 I [*Le Compendium des Collèges japonais de la Compagnie de Jésus I*], Jōchi daigaku Kirishitan bunko 上智大學キリシタン文庫 [Bibliothèque chrétienne de l'Université Sophia], Tōkyō, 1997, tome I, 467 + VIII pages ; 1997, tome II, 494 pages ; 1999, tome III, XXVII + 340 pages.

Pageès, Léon, *Histoire de la Religion Chrétienne au Japon depuis 1598 jusqu'à 1651*, 2 volumes, Paris, 1868-1870.

*Idem* : *Dictionnaire Japonais-Français, Traduit du Dictionnaire Japonais-Portugais Composé par les Missionnaires de la Compagnie de Jésus et Imprimé en 1603, A Nangasaki, et Revu sur la Traduction Espagnole du Même Ouvrage rRdigée par un Père Dominicain et Imprimée en 1630, A Manille*, Cher Firmin Didot Frères, Fils et Cie, Imprimeurs de l'Institut de la Marine, Paris Au Japon, A la Procure des Missions Etrangères, 1868, 933 pages.

Proust, Jacques : *L'Europe au prisme du Japon, XVIe-XVIIIe siècle*, Albin Michel, Paris, 1997.

Quilliet, Bernard : *Christine de Suède*, Fayard, 2003.

Saint Thomas d'Aquin : *Commentaire du Traité de l'âme d'Aristote*, Introduction, traduction et notes par Jean-Marie Vernier, Bibliothèque des Textes philosophiques, Librairie philosophique J. Vrin, Paris, 1999.

Saint Thomas d'Aquin, Docteur Angélique : *La Somme Théologique*, VIII Tomes, Traduit intégralement en français pour la première fois, avec des notes théologiques, historiques, par M. L'abbé Drioux, Paris, Librairie Ecclésiastique et Classique d'Eugène Belin, rue Christine, 5, 1851.

*Idem* : *Summa Theologica*, 8 volumes, Rome, 1885.

Schutte, Joyannes F. : *alignano's Mission Principles for Japan*, Vol. I/1 : From his Appointment as Visitor until His First Departure from Japan. Part I : The Problem (1573-1580); Vol. I/2: Part II : The Solution (1580-1582), trans. by John J. Coyne, SJ (Gujarat Sahitya Prakas : Xavier Diaz del Rio, S.J., 1980-1981.

Sophia University : *Compendium catholicae veritatis*, edited by Kirishitan Bunko Library, Sophia University, Published by OZORASHA 大空社 Co. Ltd, Président Jindō Aikawa, 2-6-6 Akabane-Minami, Kitaku, Tōkyō, 115-0044 Japon. Tél. 03 3902 2731.

- Sotillo, Juan del : *Chronicas de la apostolica Provincia de S.Gregorio de NSPS Fransisco en la Islas Philipina, China, Japon*, par Fr. Juan del Sotillo. 1738-1744. Parte tercera de la celebrissimima serphica mission de Japon.
- Tsuruta Bunshi 鶴田文史 : *Amakusa gakurin - ronkō to shiryōshū* - 天草學林 - 論考と資料集 [Le Collège d'Amakusa - études et recueil de matériaux -], *dainishū* 第二輯 [volume deux], Amakusa bunka shuppansha 天草文化出版社, 1995, 234 pages.
- Üçeler, Antoni J., SJ, Campion Hall, Oxford : « Jesuit Humanist Education in Sixteenth-Century Japa : The Latin and Japanese MSS of Pedro Gómez's 'Compendia' on Astronomy, Philosophy, and Theology (1593-95) », in *Compendium catholicae veritatis, Commentaries*, Edited by Kirishitan Bunko Library, Sophia University, pp. 11-60.
- Van Der Aa, Pierre : *Galerie agréable du monde*. Tome premier des Indes Orientales, Le tout mis en ordre et exécuté à Leide par Pierre Vander Aa, Marchand libraire, Imprimeur de l'Université et de la Ville. 1729.
- Valignano, Alessandro : *Sumario de las cosas de Japón (1592)*, edited by José Luis Álvarez-Taladriz, Monumenta Nipponica Monographs, 9, Tokyo, Sophia University, 1954. ; *Additiones*, 1592.
- Yūki Ryōgo 結城了悟 : *Iesusukai senkyōshi no kiroku ni okeru Amakusa korejo* イエズス會宣教師の記録に於ける天草コレジョ [Le Collège d'Amakusa dans les rapports des missionnaires de la Compagnie de Jésus], Nihon nijūroku seijin kinenkan 日本二十六聖人記念館, Nagasaki, 2001, 48 pages.

注

- (1) Pierre Aubenque の研究の参照されたい。
- (2) フランシスコ・パシオ (Francisco Pasio 1583-1612 年間、來日) の 1612 年の證言による。
- (3) Girard, 2002.
- (4) M. Debergh, I, JA, 1980, p., Frois, *Histoire du Japon*, II, chapitre 26, pp. 32-33.
- (5) *Compendium*, I, p. 234; MS Latin, p. 42.
- (6) *Additiones ad Dictionarium Iaponicum*, Collado, 1632, p. 303.
- (7) *Idem*, p. 585.
- (8) *Compendium*, I, p. 179 ; MS latin, p. 88recto : *philosophorum et theologorum*.
- (9) *Idem*, p. 586. また、
- Physicus, a, um [Physique]. Lus. Cousa natural, ou q [ue] (p. 587) pertence a filosofia [自然な物或は哲學に關するもの]. Iap.生得なる事 [自然な物], I,右の學問に當たる事 [上記の學問に當たる].
  - Physiología, ae. Lus. O inquirir, ou disputar da natureza das cousas. Iap.萬物の理の論談.

ペドロ、ゴメズの『講義要綱』の和譯（1595年）と日本の宗教（ジラール）

- (10) *hirosoho no go nimo hito wa atarashiki koto wo mite sono yūsho wo shiran to nageku koto tsune no hō nari to iheri. tatoheba nichigetsu no shokururu wo mitewa sono iware wo shiran to nageku yori, hirosoharu toihu koto wa idekitaru nari. kore wo motte sono kongen wo shiru moono nari.*
- (11) 感覺的靈魂の感覺的、欲求的、可動的能力で、理性的靈魂の理性的、欲求的機能。  
*Compendium*, I, p. 116 ; MS latin, p. 42. この能力という言葉は實行的な作用、第二の現實態をも意味している。「暖氣ハ其功能作用也。是ヲアット、セクンドト云フ。」  
*actus secundus cale facere*. 第二作用によって火が熱を出しているのである。  
*Compendium*, I, p. 117 ; MS latin, p. 42.
- (12) *Compendium*, I, p. 217
- (13) *Compendium*, I, p. 224.
- (14) 生命力を有するものは、生命の機能を実行するための力をもっているものごとをいうのである。「ポテンシヤピタンアベンチストハ、一命ノ功能ヲ施サンガ爲ニ精力ヲ持ツト云義也。」  
*Potentia vitam habentis ubi per vitam intelligere vitae operationes*. *Compendium*, I, p. 118 ; MS latin, p. 42verso.
- (15) *Compendium*, I, p. 122.
- (16) *Compendium*, I, p. 131.
- (17) 『二儀略説』, p. 71.
- (18) *Compendium*, I, p. 118.
- (19) *Compendium*, p. 224.
- (20) 『二儀略説』, pp. 69, 71.
- (21) *Compendium*, I, p. 120. Jap. p. 2-3. MS Latin p. 43verso.
- (22) 幾つかの生命的機能を行なう有機的靈魂、「ヲルガニシ アニマ、自己ノ作用ヲ施サンガ爲ニ」、  
*[Organici Anima] quibus forma exercet diversas operationes vitae*.  
*Compendium*, I, p. 117 ; MS latin, p. 42.
- (23) 第二に、第二現實態 (*Actus Secundus*) というのは實體的形相からなる機能である。  
「ニニハ、*Actus Secundus* 二番ノアット云義也。是即ホルマヨリ施ス處ノ作用也。」  
[...] *vel formam substantialem, a qua procedur operationes, quae dicuntur actus secundi*.  
*Compendium*, I, p. 117 ; MS latin, p. 42.
- (24) ラテン語では *potentia sensitiva...percipiat* となっている。*Compendium*, I, p. 132.
- (25) MS 414a29, p. 155.
- (26) *Compendium*, I, p. 118.
- (27) Pagès, p. 6596.
- (28) *Compendium*, I, p. 118 ; MS latin, p. 42verso.
- (29) *Compendium*, I, p. 231 ; MS Latin, p. 76verso.
- (30) 二儀略説, p. 18.
- (31) 二儀略説, p. 72.

- (32) Pagès, p. 480. *Compendium*, I, p. 217.
- (33) *Compendium*, I, p. 225.
- (34) Pagès, p. 845.
- (35) Pagès, p. 396.
- (36) Pagès, p. 401.
- (37) Pagès, p. 401.
- (38) Pagès, p. 401.
- (39) *Compendium*, I, p. 217.
- (40) 「アニマノ正體」, *anima quiditatem sive essentiam*. *Compendium*, I, p. 117 ; MS latin, p. 42.
- (41) *Compendium*, I, p. 118 ; MS latin, p. 42*verso*. 日本語譯 (p. 117) では、*physici* は *phिसici* となっている。
- (42) *Compendium*, I, p. 117 ; MS latin, p. 42.
- (43) *Compendium*, I, p. 117 ; MS latin, p. 42.
- (44) Pagès, p. 182.
- (45) *Compendium*, I, p. 228.
- (46) *Compendium*, I, p. 212, Jap. 62*recto*.
- (47) *Compendium*, I, p. 217.
- (48) 二儀略說, pp. 99-100.
- (49) 二儀略說, p. 72.
- (50) *Compendium*, I, p. 121, Jap. p. 3*verso*; MS Latin, p.44*recto*.
- (51) Pagès, p. 460.
- (52) *Compendium*, II, p. 158, et *Vocabulario*.
- (53) *Compendium*, I, p. 224.
- (54) 二儀略說, p. 85.
- (55) 二儀略說, p. 100.
- (56) 二儀略說, p. 18.
- (57) 二儀略說, p. 72.
- (58) 二儀略說, pp. 99-100.
- (59) *Compendium*, I, p. 172.
- (60) 二儀略說, p. 64. *Ibidem*, p. 69.
- (61) 二儀略說, p. 21.
- (62) 二儀略說, p. 72.
- (63) 二儀略說, p. 67.
- (64) 二儀略說, p. 72.
- (65) *Compendium*, I, p. 203.
- (66) *Compendium*, I, p. 143.



- (67) *Compendium*, I, p. 173.
- (68) *Compendium*, I, p. 116 ; MS latin, p. 42.
- (69) *Compendium*, I, p. 116 ; MS latin, p. 42.
- (70) 二儀略説, p. 59.
- (71) 二儀略説, p. 72.
- (72) *Compendium*, I, p. 116 ; MS latin, p. 42.
- (73) *Compendium*, I, p. 199.
- (74) *Compendium*, I, p. 196.
- (75) *Compendium*, I, p. 117 ; MS latin, p. 42*verso*.
- (76) *Compendium*, I, p. 137.
- (77) *Compendium*, I, p. 137.
- (78) *Compendium*, I, p. 143.
- (79) *Compendium*, I, p. 150.
- (80) *Compendium*, I, p. 150.
- (81) Pagès, p. 158. *Compendium*, I, p. 228.
- (82) 「ヲンタテ進退」, de *libertate voluntatis*, *Compendium*, I, p. 194.
- (83) 「ヲンタテ自由」, de *libertate voluntatis*, *Compendium*, I, p. 200.
- (84) Pagès, p. 740. *Compendium*, I, p. 212.
- (85) *Compendium*, I, . 220.
- (86) *Compendium*, I, p. 203.
- (87) *Compendium*, II, p. 155; MS latin, III, p. 189*recto*
- (88) *Compendium*, II, p. 155; MS latin, III, p. 189*recto*.
- (89) *Compendium*, I, p. 173.
- (90) *Compendium*, I, p. 134, Jap. pp. 10*verso*-11*recto*; MS Latin, pp. 52 *recto-verso*.
- (91) *Compendium*, I, p. 128, jap. p. 7 *verso*; MS latin, p. 49 *recto*.
- (92) Pagès, p. 97.
- (93) *Compendium*, I, p. 135, Jap. p. 11*recto*; MS latin, pp. 53 *recto*.
- (94) *Compendium*, I, p. 118 ; MS latin, p. 42*verso*.
- (95) *Compendium*, I, p. 116 ; MS latin, p. 42.
- (96) 「道理ヲ以テ」. *Compendium*, II, p. 156; MS latin, III, p. 189*recto*.
- (97) 「非道ヲ以テ」. *Compendium*, II, p. 156; MS latin, III, p. 189*recto*. 「無理」: *illicite, illicitum*. *Compendium*, II, p. 156; MS latin, III, p. 189*verso*.
- (98) *Compendium*, II, p. 156; MS latin, III, p. 189*verso*.
- (99) Pagès, p. 164.
- (100) *Compendium*, I, p. 228.
- (101) *Compendium*, I, p. 230.
- (102) *Compendium*, I, p. 117.

- (103) *Compendium*, I, p. 118.
- (104) *Compendium*, I, p. 118.
- (105) *Compendium*, I, p. 223.
- (106) Pagès, p. 932. *Compendium*, I, p. 223.
- (107) *Compendium*, I, pp. 123-124, jap., p. 5*recto*.
- (108) 1595 年の辭書, p. 83.
- (109) 1595 年の辭書, p. 83.
- (110) 1595 年の辭書, p. 83.
- (111) 1595 年の辭書, p. 83.
- (112) *Compendium*, II, p. 58.
- (113) *Compendium*, II, p. 58.
- (114) *Compendium*, I, p. 226.
- (115) *Compendium*, I, p. 228.
- (116) *Compendium*, I, p. 227.
- (117) *Compendium*, I, p. 230.
- (118) *Compendium*, I, p. 228.
- (119) *Compendium*, I, p. 123, Jap. p. 5 *recto*; MS Latin, p. 45*verso*.
- (120) *Compendium*, I, p. 173.
- (121) *Compendium*, I, p. 173.
- (122) *Compendium*, I, p. 173.
- (123) *Compendium*, I, p. 228. Pagès, p. 399.
- (124) *Compendium*, II, p. 24 ; MS latin, p. 112.
- (125) *Compendium*, II, p. 65. 該當箇所ラテン語本に無し。
- (126) Pagès, p. 658.
- (127) Pagès, p. 749.
- (128) 1595 年の辭書, p. 40.
- (129) 1595 年の辭書, p. 40
- (130) Pagès, p. 658.
- (131) *Compendium*, I, pp. 172, 219.
- (132) *Compendium*, I, p. 226.
- (133) Pagès.
- (134) *Compendium*, I, p. 223.
- (135) *Compendium*, I, p. 230.
- (136) Pagès p. 713.
- (137) Pagès, p. 658.
- (138) Pagès, p. 156.
- (139) Pagès, p. 148.

ペドロ・ゴメズの『講義要綱』の和譯（1595年）と日本の宗教（ジラール）

- (140) *Compendium* によれば不完全な動物 (*animal imperfecto*) の靈魂は部分に裂かれ、  
わかれるものである。 *Compendium*, I, p. 122, Jap. p. 4 *recto*; MS Latin, p. 44*verso*.
- (141) 二儀略説, p. 72.
- (142) 二儀略説, p. 84.
- (143) *Compendium*, I, p. 179; MS latin p. 88*verso*. Pagès, p. 870: 「人ガ面影ニ立ツ」、人の  
顔を想像する。
- (144) *Compendium*, I, p. 179.
- (145) *Compendium*, I, p. 214.
- (146) *Compendium*, I, p. 126. ラテン語無し。
- (147) *Compendium*, I, p. 213.
- (148) 例えば、*Compendium*, I, p. 119.
- (149) 二儀略説, pp. 21, 22.
- (150) Pagès, p. 368.
- (151) *Compendium*, I, p. 181. *Cognoscatur*, *Compendium*, I, p. 187.
- (152) *Compendium*, I, p. 135, Jap. p. 11*recto*; MS Latin, p. 53 *recto*.
- (153) *Compendium*, I, p. 116; MS latin, p. 42.
- (154) *Compendium*, I, p. 116.
- (155) : Pagès, p. 156 : *cocoro* 心, *mi* 身, 靈魂や精神と身體。
- (156) *Compendium*, I, p. 122.
- (157) *Compendium*, I, p. 224, jap. p. 68*recto*。ラテン語の無い文章。
- (158) 二儀略説, p. 76.
- (159) *Compendium*, I, p. 173.
- (160) 二儀略説, p. 78.
- (161) *Compendium*, I, p. 173.
- (162) *Compendium*, I, p. 175.
- (163) *Compendium*, I, p. 175.
- (164) *Compendium*, II, p. 155; MS latin, III, p. 189*recto*.
- (165) *Compendium*, I, p. 224.
- (166) 二儀略説, p. 20.
- (167) *Compendium*, I, p. 213.
- (168) *Compendium*, I, p. 154.
- (169) Pagès, p. 347. *Compendium*, I, p. 213.
- (170) *Compendium*, I, p. 180.
- (171) *Compendium*, I, p. 181.
- (172) *Compendium*, I, p. 181.
- (173) *Compendium*, I, p. 201.
- (174) *Compendium*, I, p. 201.

- (175) *Compendium*, p. 224.
- (176) *Compendium*, I, p. 171; Jap. 32; MS latin, 80 *recto-verso*.人間の靈魂はデウスの分身ではないという文脈で出ている言葉。
- (177) *Compendium*, I, p. 171; Jap. 32; MS latin, 80 *recto-verso*)
- (178) Pagès, p. 184.
- (179) *Compendium*, I, p. 223.
- (180) Pagès, p. 586.
- (181) *Compendium*, I, p. 228.
- (182) *Compendium*, I, p. 228.
- (183) *Compendium*, I, p. 228.
- (184) Pagès, p. 97. *Compendium*, I, p. 135, Jap. p. 11*recto*, Latin, p. 53 *recto*.
- (185) *Compendium*, I, p. 173 ; *ibidem*, pp. 22, 29, 41, 47, 51.
- (186) *Compendium*, II, p. 29; MS latin p. 115.
- (187) 新約聖書、Galates, II-16 の翻譯。*Compendium*, II, p. 47.
- (188) *Compendium*, II, p. 155; MS latin, III, p. 189*recto*.
- (189) *Compendium*, II, § 71, pp. 158-159. MS latin, III, p. 191*verso*-192*recto*.
- (190) Pagès, p. 444.
- (191) *Compendium*, II, § 71, p. 158. MS latin, III, p. 191*recto* (他所では「妄念」とも翻譯されている)。
- (192) *Compendium*, II, § 71, p. 158. MS latin, III, p. 191*recto* : 「恵化レシヤノ御教化ニ隨フヘシトノ覺悟アル間ハエレセニハアラス。」
- (193) *Compendium*, II, § 71, p. 158. MS latin, III, p. 191*recto*.
- (194) *Compendium*, II, § 71, p. 158. MS latin, III, p. 191*recto* : 「恵化レシヤノ御教化ニ隨フヘシトノ覺悟アル間ハエレセニハアラス。」
- (195) Pagès, p. 76
- (196) *Compendium*, I, p. 225.
- (197) *Compendium*, I, p. 225.
- (198) *Compendium*, I, p. 228.
- (199) *Compendium*, II, p. 155; = latin, III, p. 189*recto*.
- (200) Pagès, p. 272. *Compendium*, I, p. 228.
- (201) Pagès, p. 845.
- (202) *Compendium*, I, p. 225.
- (203) *Compendium*, I, p. 128, jap. p. 7 *verso*; MS latin, p. 49 *recto*
- (204) *Compendium*, II, p. 175.
- (205) *Compendium*, I, p. 185.
- (206) *Compendium*, I, pp. 124, 234, etc. ; *ibidem*, II, pp. 33, 134, 141, 155.
- (207) *Compendium*, I, p. 225.

ペドロ・ゴメズの『講義要綱』の和譯（1595年）と日本の宗教（ジラール）

- (208) *Compendium*, I, p. 120, Jap. p. 2; MS Latin, p. 44 *recto*.
- (209) *Compendium*, I, p. 174, jap. 34; MS latin, p. 83 *recto*.
- (210) *Compendium*, I, p. 116 ; MS latin, p. 42.
- (211) *Compendium*, I, p. 116 ; MS latin, p. 42.